

平成 27 年 11 月 25 日
農林水産技術会議事務局研究調整課

国立研究開発法人の第 4 期中長期目標の検討について (農研機構、JIRCAS)

1 背景・経緯

農林水産技術会議事務局所管の国立研究開発法人は平成 27 年度で第3期中期目標期間を終了する。また、(研)農業・食品産業技術総合研究機構(以下「農研機構」という。)、(研)農業生物資源研究所、(研)農業環境技術研究所及び(独)種苗管理センター(食料産業局所管)の4法人は平成 28 年 4 月に統合することとなっている。このため、農林水産省の関係部署と関係法人は、昨年より定期的に意見交換を行い、法人統合や第4期の業務に関する検討を進め、今般、統合後の農研機構及び(研)国際農林水産業研究センター(以下「JIRCAS」という。)の第4期中長期目標(案)を作成した。

2 内容(別添参照)

- ・別添1: 農業関係国立研究開発法人の第4期中長期目標のポイント(パワポ版) : P3
- ・別添2: 農業関係国立研究開発法人の第4期中長期目標のポイント(文章版) : P15
- ・別添3: 農研機構第4期中長期目標(案) : P17
- ・別添4: JIRCAS 第4期中長期目標(案) : P53

3 スケジュール(予定)

- ①農林水産技術会議(11月5日)
- ②研究開発に関する審議会(農業部会)(11月25日)
- ③農林水産技術会議(12月8日): 総務省に送付する案を決定
- ④総務省独立行政法人評価制度委員会(2月)
- ⑤農林水産技術会議(2月23日): 総務省意見による変更の報告
- ⑥中長期目標決定(2月末)

関係条文：独立行政法人通則法

(中長期目標)

第三十五条の四 主務大臣は、五年以上七年以下の期間において国立研究開発法人が達成すべき業務運営に関する目標(以下「中長期目標」という。)を定め、これを当該国立研究開発法人に指示するとともに、公表しなければならない。これを変更したときも、同様とする。

2 中長期目標においては、次に掲げる事項について具体的に定めるものとする。

一 中長期目標の期間(前項の期間の範囲内で主務大臣が定める期間をいう。以下同じ。)

二 研究開発の成果の最大化その他の業務の質の向上に関する事項

三 業務運営の効率化に関する事項

四 財務内容の改善に関する事項

五 その他業務運営に関する重要事項

3 主務大臣は、中長期目標を定め、又はこれを変更しようとするときは、あらかじめ、委員会の意見を聴かなければならない。

(注) 委員会：総務省に設置される独立行政法人評価制度委員会

4 主務大臣は、前項の規定により中長期目標に係る意見を聴こうとするときは、研究開発の事務及び事業(軽微なものとして政令で定めるものを除く。第三十五条の六第六項及び第三十五条の七第二項において同じ。)に関する事項について、あらかじめ、審議会等(内閣府設置法(平成十一年法律第八十九号)第三十七条若しくは第五十四条又は国家行政組織法(昭和二十三年法律第二百十号)第八条に規定する機関をいう。)で政令で定めるもの(以下「研究開発に関する審議会」という。)の意見を聴かなければならない。

5 略

6 略

農業関係国立研究開発法人の 第4期中長期目標のポイント

— 農業現場の技術革新を目指すための改革 —

1. 農業関係国立研究開発法人をめぐる諸情勢

① 新たな食料・農業・農村基本計画の策定・公表(H27.3)

「農林水産業・地域の活力創造プラン(農林水産業・地域の活力創造本部決定、平成26年6月改訂)の方向性を踏まえ策定。本計画では、**農業の生産・流通現場の技術革新等の実現を目指す**こと等とされている。

② 新たな農林水産研究基本計画の策定・公表(H27.3)

食料・農業・農村基本計画を**技術開発面から支えるもの**として策定。
国立研究開発法人は**本計画の実現の中核的な役割**を担う。

- 「**生産現場等が直面する課題を速やかに解決するための研究開発**」を最優先課題に位置づけ。
- **最先端技術シーズを国産農林水産物のバリューチェーンに結びつける新たな産学官連携の仕組み**を創設。
- **ニーズに直結した研究の戦略的展開、異分野融合研究の強化**などの研究マネジメント改革を実施。
- **レギュラトリーサイエンス**に属する研究の推進方向を明確化

③ 農林水産技術会議事務局の再編(H27.10)

- **試験研究、開発から実用化、普及までの専門領域を有機的に連携させ、農業の成長産業化の基礎となる技術行政を強化**。その司令塔として、大臣官房技術総括審議官が農林水産技術会議事務局長を兼務する体制を構築。

④ 農業関係国立研究開発法人の再編(H28.4)

- 政府の独立行政法人改革の一環として、**農研機構、生物研、農環研、種苗Cの4法人を統合し、ひとつの国立研究開発法人**とすることで、研究開発成果の最大化を目指す。
- JIRCASについては、**開発途上地域や関係機関での高いプレゼンスを活かすため単独存置**。

※ 農研機構:(研)農業・食品産業技術総合研究機構、生物研:(研)農業生物資源研究所、農環研:(研)農業環境技術研究所、種苗C:(独)種苗管理センター、JIRCAS(研)国際農林水産業研究センター

2. 諸情勢を踏まえた今後の技術開発の方向(国全体)

挑戦① 民間活力等を活かした『知』の集積と活用の推進

スピード感をもって商品化・事業化に導くため、**農林水産・食品分野**と異分野が連携する新たな産学連携研究の仕組みを創出。



新たな商品化・事業化を通じ農林水産・食品産業を成長産業化

挑戦② 革新技術による「強み」のある農産物の開発

強みのある農産物を開発するため、今までにない特色をもたらし品種を**ゲノム編集技術**等の**革命的な育種技術**により迅速に開発。



収量が10aあたり1.5t程度の育種素材



遺伝子組換えカイコによる医薬品等の生産



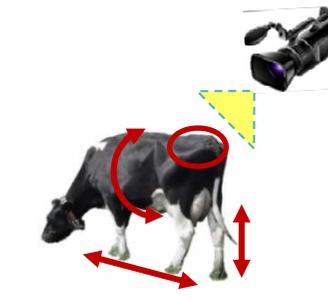
カットした後もきれいな色のままのリンゴ

挑戦③ 生産性の飛躍的向上による生産現場の強化

農林水産業の成長産業化に向け、生産現場のニーズに直結した革新的な新技術の開発を推進



アシストスーツ



乳用牛の自動監視システム



イチゴ収穫ロボット

3. 第3期中期目標期間までの業務進捗状況

(1) 顕著な進展が見られた研究

○ 優れた研究成果

【例】低コスト水田輪作技術、超強力小麦品種など各種作物品種、農作物の機能性解明、鳥インフルエンザ迅速判定技術、ジーンバンクでの遺伝資源の整備、カドミウム低吸収稲品種

○ 震災復興に大きく貢献。

農地除染技術を開発し被災地での除染事業に貢献。また、革新実証事業だけでも全国64箇所の実証研究を実施。



畑作用大型機械を使った水稲直播技術



鳥インフルエンザの迅速検査法



除染作業機械の現地実証
(福島県)



大規模施設園芸実証研究施設
(宮城県)

(2) 一層の進捗を期待される研究・業務

○ 外部機関との連携・技術移転はなお強化が必要

新たな取り組みも行われ成功例は出ているが、研究成果の現場への橋渡しには、なお改善が必要。

○ 平成28年4月の法人統合に向けた準備

平成27年9月に統合法が成立。統合を契機とし、研究推進等で高い相乗効果をあげ、管理面等で効率化を進めることが必要。



超強力小麦「ゆめちから」の普及活動



開発品種を研究者が消費者に直接アピールする「食のセミナー」

(3) 現状で不十分

○ 法人のガバナンスは不十分

第3期に不適正経理問題、情報セキュリティ・インシデント等が発生しており、内部統制強化・コンプライアンス推進等が必要。

4. 第4期の重点事項

- 農業に関する技術開発により、国民生活の質の向上に貢献するという使命を果たし、さらには、地球規模の課題への対処など、世界への貢献を行うため、以下の改革を行う。

背景①、②

- 優れた研究成果を活用
- 実証研究の経験・蓄積
- 産学官連携・技術移転の強化
- 農林水産省知的財産戦略2020(平成27年5月28日)の策定

重点事項① 研究開発成果の最大化に向けた研究マネジメント改革

- (1) ニーズに直結した研究の推進
- (2) 異分野融合・産学官連携によるイノベーション創出
- (3) 地域農業研究のハブ機能の強化
- (4) 世界を視野に入れた研究推進の強化
- (5) 知的財産マネジメントの戦略的推進

重点事項② 農政の方向に即した研究開発の推進

- (1) 生産現場等が直面する問題を解決する研究開発等を推進
 - ① 生産現場の強化・経営力の強化
 - ② 強い農業の実現と新産業の創出
 - ③ 農産物・食品の高付加価値化と安全・信頼の確保
 - ④ 環境問題の解決・地域資源の活用
- (2) 技術移転に向けた実証試験等を強化
- (3) 目的基礎研究の推進

背景③

- H28年4月法人統合
- 法人のガバナンスが不十分

重点事項③ 国立研究開発法人の再編・ガバナンス強化への対応

- (1) 4法人統合の相乗効果を発揮
- (2) 法人のガバナンス強化

5. 重点事項①: 研究マネジメント改革

(1) ニーズに直結した研究の推進

- 農業・食品産業等の現場や政策ニーズを起点とし、具体的成果を見据えた研究課題の設定。
- 研究推進における農業者や実需者の関与を強化。



(2) 異分野融合・産学官連携によるイノベーション創出

- ICT・ロボット、ゲノム育種等の分野で重点化研究センターを新設。外部機関と連携し研究開発・商品化・事業化を推進。
- 農林水産技術会議事務局が行う「『知』の集積と活用の場」と連携。

〈過去のイノベーションの例〉



20世紀後半、高収量品種と化学肥料大量投入による農業技術革命が穀物大增産を実現。日本の小麦品種が育種親として活用された。

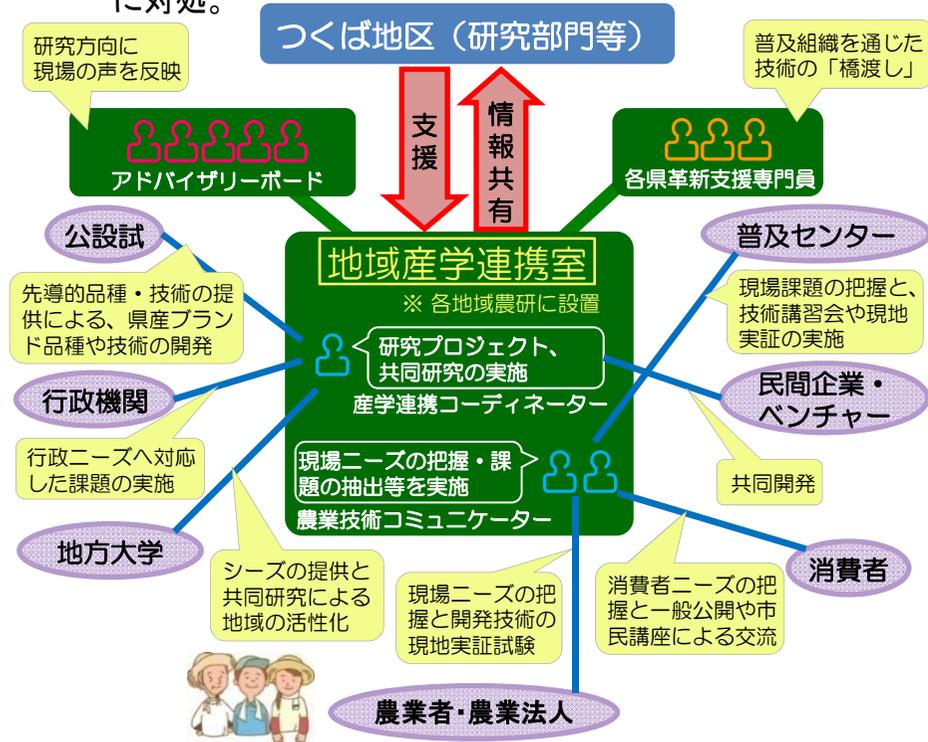
田植機は水稻生産を劇的に変えた



世界を変えた「小麦農林10号」 ※写真は開発中の無人田植えロボット

(3) 地域農業研究のハブ機能の強化

- 地域農業研究センターを新法人のフロントラインと位置付け、農業者からなるアドバイザリーボードや地域産学連携室を新設。地域の研究機関、普及機関、生産者等と地域の課題に対処。



(4) 世界を視野に入れた研究推進の強化

- 農林水産物の輸出に貢献する研究と国外の関係機関との連携を推進。



輸出向けに化学農薬を使用しない場合の茶生産技術を開発



安倍首相立ち会いのもと、モザンビーク国立農業研究所との共同研究に関する覚書を締結

(5) 知的財産マネジメントの戦略的推進

- 権利化・秘匿化・公知化・標準化、特許等の開放、実施許諾等、事業の成功を通じた社会実装を加速化する観点から最も適切な方法を採用。

5. 重点事項②: 農政の方向に即した研究開発の推進

(1) 生産現場が直面する問題を解決する研究開発等を推進

- 生産現場等が直面する課題を速やかに解決するための研究開発を最優先課題に位置づけ推進。
- 中長期的な戦略の下で着実に推進すべき研究開発についても計画的かつ体系的に展開。

① 生産現場の強化・経営力の強化

生産現場等が直面する課題を速やかに解決するための研究開発や、農業の生産流通システムを革新し、大幅なコスト削減を実現する研究開発。



先行する無人トラクタによる耕うんと追従する有人トラクタによる播種



分娩後の子宮や卵巣機能の回復状態を容易に判定する技術の開発を通じ、授精適期を早期化

② 強い農業の実現と新産業の創出

農産物の単収・品質向上を促進し、「強み」をさらに引き伸ばす研究開発や、農村に新たな産業と雇用を生み出す研究開発



- ・ 超多収良味業務用及び超多収加工用水稲品種の開発
- ・ 実需者のニーズに応じた加工適性や広域適応性を持つ小麦、大豆、野菜、果樹の品種開発

③ 農産物・食品の高付加価値化と安全・信頼の確保

安全で信頼され付加価値の高い農産物・食品の安定供給や、国民の健康長寿に貢献する研究開発

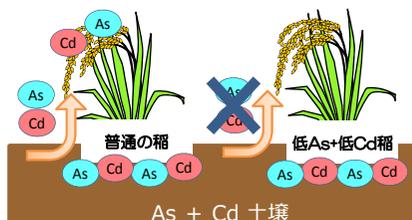


カロエワン
長球形で、上部、下部をカットしたときの歩留まりが高い

業務・加工用途に適した長球形タマネギ品種の開発



スーパー北もみじ
(通常品種)



ヒ素及びカドミウムの低吸収性品種の開発

④ 環境問題の解決・地域資源の活用

農業の持続化・安定化を図る研究開発や、地球規模の食料・環境問題に対処する研究開発



予測研究等に基づく中長期視点を踏まえた品種・育種素材や生産安定技術の開発

(2) 技術移転に向けた実証試験等を強化

- 重点化する研究方法毎に、研究開発成果の移転先や移転に向けた研究(現地実証試験等)を行い、迅速な普及・実用化を目指して研究を推進。



水稲・麦・大豆を基幹とする輪作システムや多収で低コストのイネ生産システムを確立

(3) 目的基礎研究の推進

- 「農林水産研究基本計画」の目指す目標に即して、将来のイノベーションにつながる技術シーズの創出を目指す基礎・基盤的な研究開発(目的基礎研究)を着実に実施。

5. 重点事項③: 統合の相乗効果発揮・ガバナンス強化

(1) 4法人統合の相乗効果を発揮

→ 基礎から応用・実用化まで一貫した研究推進のため新たな体制を構築。

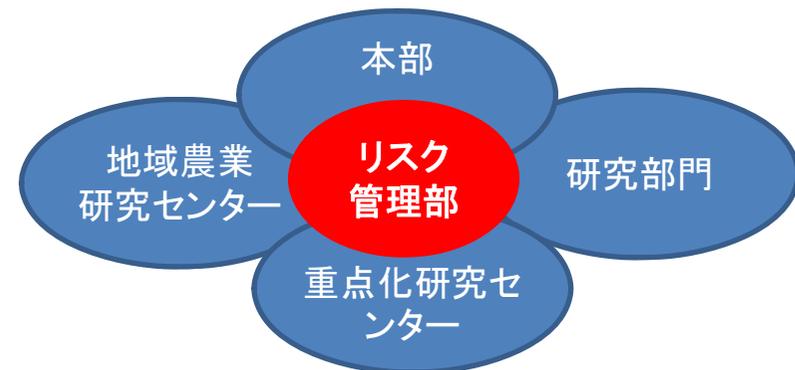


→ つくば地区等の管理業務、ほ場業務の再編(可能な業務の一元化等)。



(2) 法人のガバナンス強化

- 理事長のリーダーシップの下、役員による迅速・的確な意思決定。
- リスク管理専門組織設置、コンプライアンス推進体制等の強化。



6. 新法人の組織概要(案)

理事長・副理事長・理事 監事

本部

- つくば管理センター
- つくば技術支援センター
- リスク管理部

つくば地区の検収業務等を一元的に実施。
 つくば地区の圃場管理業務を一元的に実施。
 コンプライアンス・情報セキュリティを強化。

遺伝資源センター

高度解析センター

高度な分析機器・施設を共同利用。

食農ビジネス推進センター

輸出関係を重要なテーマとし、産学官連携の司令塔となる。

- 重点化研究センター
- 次世代作物開発研究センター
(作物開発研究の中核)
 - 農業技術革新工学研究センター
(スマート農業研究の中核)
 - 農業環境変動研究センター
(環境研究の中核)

従来組織を融合的に新設。
 各専門分野のハブとしてイノベーションを目指す。

- 地域農業研究センター
- 北海道農業研究センター
 - 東北農業研究センター
 - 中央農業研究センター
 - 西日本農業研究センター
 - 九州沖縄農業研究センター

地域農業研究のハブ機能を強化。
 地域産学連携室を新設。
 現場ニーズの把握・成果の橋渡しを行うコミュニケーター、共同研究等の調整を行うコーディネーターを新たに設置。

- 研究部門
- 果樹茶業研究部門
 - 野菜花き研究部門
 - 畜産研究部門
 - 動物衛生研究部門
 - 農村工学研究部門
 - 食品研究部門
 - 生物機能利用研究部門

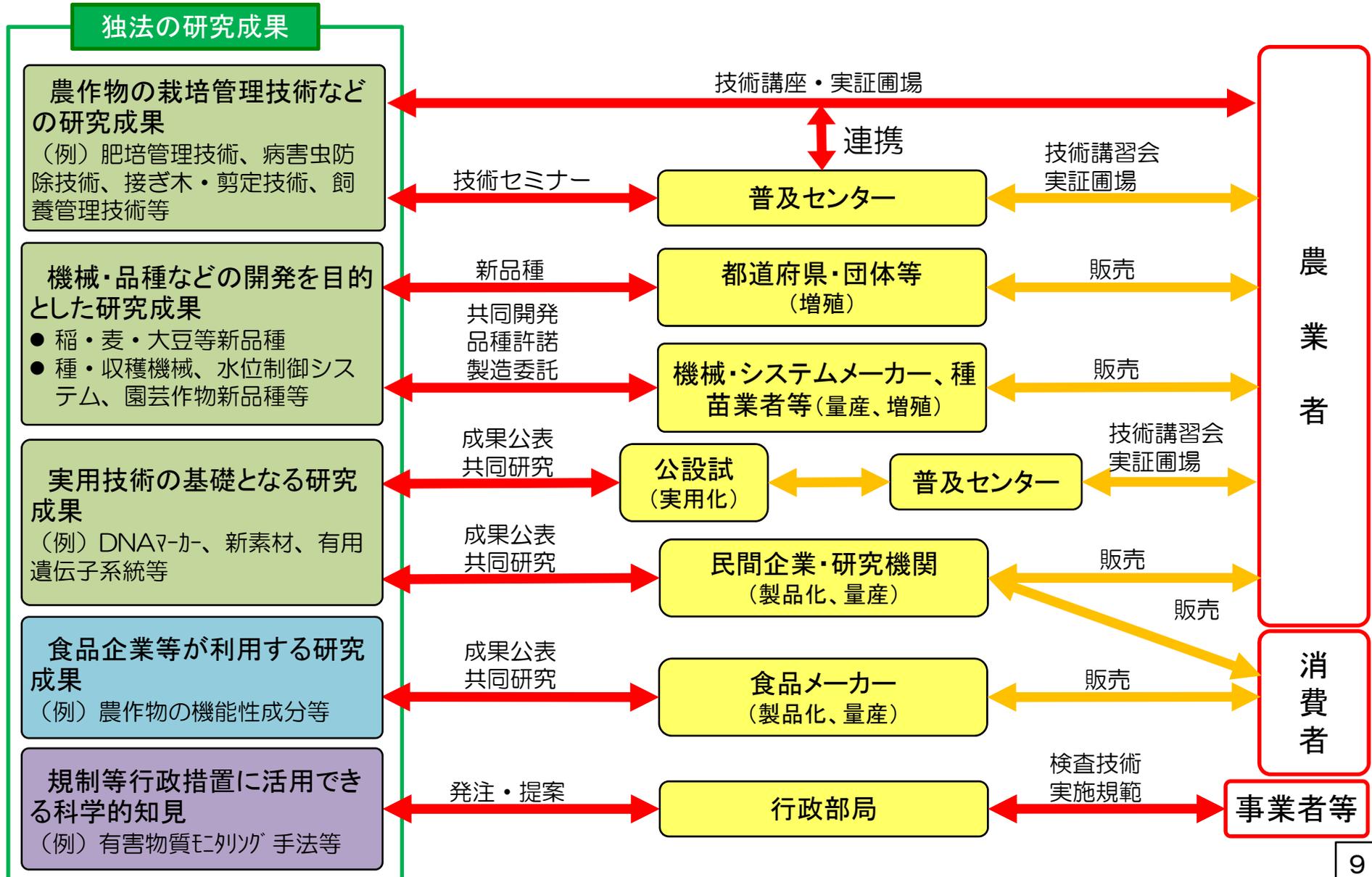
専門性の継承や人材育成。
 専門家集団としてレギュラトリーサイエンス等、行政への対応。
 重点化研究センターや地域農業研究センターをサポート。

種苗管理センター

生物系特定産業技術研究支援センター
 (研究資金の提供)

7. 技術開発から普及の加速化

○ 普及組織と連携し、生産者、実需者、民間企業等に技術移転



8. 国際農林水産業研究センターの第4期の重点事項

背景①

● 優れた研究成果を活用

乾燥、塩害等の環境下で生育を確保する遺伝子及びリン酸欠乏土壌下で生育が確保できる根の伸長を促す遺伝子を発見。



当該環境ストレス遺伝子を持つ系統
環境ストレス耐性遺伝子を持つ系統

● 海外での高いプレゼンス



安倍総理立ち会いのもと、メキシコ国立農牧林研究所との共同研究に関する覚書を締結

● H28年4月法人統合

背景②

● 法人のガバナンスが不十分

重点事項① 研究開発成果の最大化に向けた研究マネジメント改革

- 地球規模の食料・環境問題に対処し、**国際貢献**を図る。
- 開発途上地域の農林水産業の技術の向上による**当該地域の食料問題の解決**を通じて、**我が国の食料安全保障に寄与**。
- 我が国の**企業・生産者等が活用できる技術シーズ**や**知見が得られた場合には、事業化等に貢献するための情報提供や現地での支援等**を積極的に実施。
- **農研機構等との強い連携体制を構築し、効果的・効率的に業務を推進**。



同型のICリアクター

JIRCASの特許技術と株式会社IHI環境エンジニアリング発酵反応器（IHI-ICリアクター）を組み合わせることで、オイルパーム古木やパーム油工場排水をメタンガスに変換。
製造されるメタンガスは、工場の発電燃料や、液体燃料化してヤシの実を運ぶトラックの燃料に利用する予定。

重点事項② 政府方針に則した開発途上地域における研究開発

- アフリカ開発支援などに向けた政府の方針や**農林水産省が主導するグローバルフードバリューチェーン戦略等**に即した研究開発。
- **海外機関や国際機関等と連携した研究開発**。

【重点課題】

- ① 持続的な資源・環境管理技術の開発
- ② 熱帯等の不良環境における農作物等の安定生産技術の開発
- ③ 地域資源等の活用と高付加価値化技術の開発

重点事項③ 法人のガバナンス強化

- 理事長のリーダーシップの下、役員による迅速・的確な意思決定を推進。
- コンプライアンス推進体制等強化。

農業関係国立研究開発法人の第 4 期中長期目標のポイント（案）

I. 基本的考え方

農業関係国立研究開発法人は、社会情勢等の変化に的確に対応しつつ、農業に関する技術開発を通じて国民生活の質の向上に貢献するという使命を果たし、更には、地球規模の課題への対処など世界への貢献を図る必要がある。

そのため、①新たな「食料・農業・農村基本計画」の策定・公表、②同計画の実現を技術開発面から支える「農林水産研究基本計画」の策定・公表、③政府の独立行政法人改革等の情勢変化に対応し、法人の改革を行いつつ農政の動向に即した研究開発等を実施する観点から、第 4 期中長期目標を定める。

II. ポイント（第 3 期中長期目標からの主な変更点）

1. 研究開発成果の最大化に向けた研究マネジメント改革

（1）ニーズに直結した研究の推進 [参照：22頁31行]

中長期計画やその達成のための研究課題は、農業や食品産業等の現場や政策ニーズを起点とし、具体的成果を見据えて設定する。また、現場で活用される技術の創出を図るため、研究推進における農業者や実需者等の関与を強化する仕組みを構築・運用する。

（2）異分野融合・産学官連携によるイノベーション創出 [参照：23頁20行]

ICT・ロボット、ゲノム育種等の分野で重点化研究センターを設置し、外部機関と連携し、研究開発・商品化・事業化を推進する。

また、農林水産技術会議事務局が行う『知』の集積と活用の中核的取り組みと連携しイノベーション創出を目指す。

（3）地域農業研究のハブ機能の強化 [参照：24頁 7行]

地域農業研究センターを新法人のフロントラインと位置付け、産学官連携機能を強化するとともに、他の研究機関、普及機関、生産者等と連携し地域の課題に対処する。

（4）世界を視野に入れた研究推進の強化 [参照：24頁18行]

海外の研究機関等との連携を強化し、地球規模の様々な研究課題等に対処する。また、農林水産物の輸出に貢献する研究の推進を強化。

（5）知的財産マネジメントの戦略的推進 [参照：24頁36行、58頁 1行]

権利化・秘匿化・公知化・標準化、特許等の開放、独占的な実施許諾等の選択肢を視野に入れ、最も適切な方法を採用し、研究成果の事業化を推進する。

2. 農政の方向に即した研究開発の推進

(1) 生産現場等が直面する問題を解決する研究開発等を推進 [参照：27頁16行]
生産現場等が直面する問題を速やかに解決するための研究開発を最優先課題と位置づけ推進する。 中長期的な戦略の下で着実に推進すべき研究開発についても計画的かつ体系的に展開する。

(2) 技術移転に向けた実証試験等を強化 [参照：27頁32行]

重点化する研究方向毎に、研究開発成果の移転先や移転に向けた研究等（現地実証試験等）を行い、迅速な普及・実用化を目指して研究を推進する。

(3) 目的基礎研究の推進 [参照：27頁35行]

「農林水産研究基本計画」の目指す方向に即して、将来のイノベーションにつながる技術シーズの創出を目指す基礎・基盤的な研究開発（目的基礎研究）を中長期目標に明記し、着実に実施する。

3. 国立研究開発法人の再編・ガバナンス強化への対応

(1) 法人統合の相乗効果を発揮 [参照：32頁18行]

農研機構、生物研、農環研、種苗管理センターの4法人統合を契機に、基礎から応用・実用化まで一貫した研究を効果的・効率的に推進する体制を構築する。

また、つくば地区等の管理業務、ほ場業務等について可能なものの一元化を進める。

JIRCAS については、海外での知名度を活かすため単独存置となるが、統合後の農研機構等との連携を強化し効果的・効率的な業務運営を図る。

(2) 法人のガバナンス強化 [参照：33頁34行、61頁34行]

理事長のリーダーシップの下、役員による迅速・的確な意思決定を行う。 また、リスク管理専門組織の設置、コンプライアンス推進体制の強化等を行う。

* 上記の国立研究開発法人の正式名称は次のとおり。

農研機構：国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

生物研：国立研究開発法人 農業生物資源研究所

農環研：国立研究開発法人 農業環境技術研究所

JIRCAS：国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター

1 農研機構 第4期 中長期目標 案

4 構成

6 第1 政策体系における法人の位置づけ及び役割

- 7 (1) 我が国の農業及び農政の動向
- 8 (2) 「農林水産研究基本計画」の考え方と農研機構の役割
- 9 (3) 独立行政法人改革の動き
- 10 (4) 期間中における重点事項

11 第2 中長期目標の期間

12 第3 研究開発の成果の最大化その他の業務の質の向上に関する事項

13 <共通事項>

14 3-1. ニーズに直結した研究の推進とPDCAサイクルの強化

- 15 (1) ニーズに直結した研究の戦略的展開
- 16 (2) 法人一体の評価と資源配分

17 3-2. 異分野融合・産学官連携によるイノベーション創出

- 18 (1) 異分野融合研究の強化
- 19 (2) 産学官連携の戦略的推進

20 3-3. 地域農業研究のハブ機能の強化

21 3-4. 世界を視野に入れた研究推進の強化

22 3-5. 知的財産マネジメントの戦略的推進

- 23 (1) 知的財産マネジメントに関する基本方針の策定
- 24 (2) 知的財産マネジメントによる研究開発成果の社会実装の促進

25 3-6. 研究開発成果の社会実装の強化

- 26 (1) 研究開発成果の公表
- 27 (2) 技術移転活動の推進
- 28 (3) 規制対応研究の一体的実施
- 29 (4) 広報活動の推進

- 30 (5) 国民との双方向コミュニケーション

- 31 (6) 研究開発成果の中長期的な波及効果の把握と公表

32 3-7. 行政部局との連携強化

33 3-8. 専門研究分野を活かしたその他の社会貢献

34 <個別事業>

35 3-9. 農業研究業務の推進（試験及び研究並びに調査）

- 1
- 2 **3-10. 種苗管理業務の推進**
- 3 (1) 業務推進の基本方針
- 4 (2) 農林水産植物の品種登録に係る栽培試験等
- 5 (3) 農作物（飼料作物を除く。）の種苗の検査、指定種苗の集取、立入検査等
- 6 (4) ばれいしょ及びさとうきびの増殖に必要な種苗の生産、配布等
- 7 (5) 種苗管理業務に係る研究開発成果の現場への橋渡し等
- 8 **3-11. 農業機械化の促進に関する業務の推進**
- 9 (1) 業務推進の基本方針
- 10 (2) 研究の重点化及び推進方向
- 11 (3) 行政ニーズへの機動的対応
- 12 (4) 効率的・効果的な研究開発を進めるための配慮事項
- 13 (5) 農業機械の検査・鑑定
- 14 (6) 農作業の安全に資する情報収集・分析とそれを踏まえた農業機械の開発及び評価試
- 15 験の高度化
- 16 **3-12. 生物系特定産業技術に関する基礎的研究の推進**
- 17 **3-13. 特例業務（民間研究促進業務に係る資金回収業務）**
- 18
- 19 **第4 業務運営の効率化に関する事項**
- 20 **4-1. 業務の効率化と経費の削減**
- 21 (1) 一般管理費等の削減
- 22 (2) 調達の合理化
- 23 **4-2. 統合による相乗効果の発揮**
- 24 (1) 組織・業務の再編
- 25 (2) 研究拠点・研究施設・設備の集約（施設及び設備に関する計画）
- 26 **第5 財務内容の改善に関する事項**
- 27 (1) 収支の均衡
- 28 (2) 業務の効率化を反映した予算の策定と遵守
- 29 (3) 自己収入の確保
- 30 (4) 保有資産の処分
- 31 **第6 その他業務運営に関する重要事項**
- 32 **6-1. 法人のガバナンス強化**
- 33 (1) 内部統制システムの構築
- 34 (2) コンプライアンスの推進
- 35 (3) 情報公開・情報セキュリティの推進
- 36 (4) 環境対策・安全管理の推進

1	6-2. 研究を支える人材の確保・育成
2	（1）人材育成プログラムの策定と実施
3	（2）人事に関する計画
4	（3）人事評価システムの構築と運用
5	（4）職員の給与体系等の見直し
6	6-3. 主務省令で定める業務運営に関する事項
7	
8	【別添1】 研究開発の重点化方向と成果の社会実装
9	
10	【別添2】 種苗管理業務の推進
11	
12	

1 第1 政策体系における法人の位置づけ及び役割

2 (1) 我が国の農業及び農政の動向

3 我が国の農林水産業は、国民に良質な食料を供給するという本質的な役割に加え、基幹
4 産業として地域経済を支え、コミュニティの維持や伝統文化の継承、国土の保全など様々
5 な役割・機能を果たしてきたが、今日、従事者の高齢化・減少が進み、後継者が大幅に不
6 足する等、生産基盤の脆弱化が進む厳しい状況にある。しかし、一方では、我が国の農業
7 は、高品質な農作物を生産する技術、世界に評価される食文化などすばらしい潜在力を有
8 しており、農業生産の現場では 100ha を超える大規模経営や先端技術を活用した施設園芸
9 に取り組む経営など従来は想定されなかった新たな経営も出現している。また、創意工夫
10 を発揮して6次産業化や海外への輸出などに挑戦し、新たな価値の創出と市場の開拓を実
11 現する取組も始まっている。

12
13 こうした情勢を背景に、平成 25 年 12 月に「農林水産業・地域の活力創造プラン」（平
14 成 25 年 12 月 10 日農林水産業・地域の活力創造本部決定、平成 26 年 6 月 24 日改訂）が決
15 定された。これは、①国内外の需要の拡大、②需要と供給をつなぐ付加価値向上のための
16 バリューチェーンの構築、③農地の集約化など生産コスト削減等を通じた生産現場の強化、
17 ④農村の多面的機能の維持・発揮の4つの柱を軸に政策を再構築したもので、いわゆる「攻
18 めの農林水産業」を目指すものである。

19 こうした施策の方向にこれまでの施策の評価を加え、食料・農業・農村施策の改革を進
20 め、若者たちが希望の持てる「強い農業」、「美しく活力ある農山漁村」を目指す観点から、
21 新たな「食料・農業・農村基本計画（平成 27 年 3 月 31 日）」が閣議決定された。また、同
22 時に、同計画の実現を技術開発面から支えるものとして「農林水産研究基本計画」（平成 27
23 年 3 月 31 日農林水産技術会議決定）が策定された。

25 (2) 「農林水産研究基本計画」の考え方と農研機構の役割

26 新たな「農林水産研究基本計画」は、生産現場が直面する問題を速やかに解決するため
27 の研究開発を最優先課題に位置づけ、分野・品目ごとに具体的な研究開発の目標を定める
28 とともに、地球温暖化の進行への対応など中長期的な視点で取り組むべき課題について基
29 本的な方向を定めている。また、急速に発展しつつある情報通信技術（以下「ICT」という。）
30 やロボット技術といった異分野の知識・技術等を積極的に導入して、革新的な技術シーズ
31 を生み出すとともに、それらの技術シーズを国産農林水産物のバリューチェーンに結びつ
32 ける新たな産学官連携研究の仕組みを設けることとしている。

33 このような中で、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（以下「農研機構」
34 という。）は、今後、研究ポテンシャルをさらに高め、「農林水産研究基本計画」を実現
35 するための中核的な役割を担うとともに、農業・食品産業に関する技術開発を通じて国民
36 生活の質の向上に貢献し、さらには地球規模の課題への対処など世界への貢献も期待され

1 ている。

3 (3) 独立行政法人改革の動き

4 農研機構、国立研究開発法人農業生物資源研究所、国立研究開発法人農業環境技術研究
5 所は、農政上の技術的課題に対応し、我が国農業及び食品産業その他の関連産業の発展や
6 国民生活の質の向上に欠くことのできない技術開発を行ってきた。また、独立行政法人種
7 苗管理センターは、新品種開発につながる適正な品種登録のための栽培試験や、優良な種
8 苗の生産流通のための種苗検査及び種苗生産等の業務を行ってきた。

9
10 政府の独立行政法人改革の検討が進む中、平成 25 年 12 月に「独立行政法人改革等に関
11 する基本的な方針（平成 25 年 12 月 24 日）」が閣議決定された。その中でこれら 4 法人に
12 ついては統合し、基礎から応用・実用化まで一貫した研究体制を構築することで研究開発
13 成果の最大化をめざすこととされ、平成 27 年 9 月に統合等を行うための法律「独立行政法
14 人に係る改革を推進するための農林水産省関係法律の整備に関する法律」（平成 27 年法律
15 第 70 号）が成立した。農研機構は独立行政法人改革の趣旨を踏まえ研究開発成果の最大化
16 を目指す必要がある。具体的には、食料・農業・農村に係る問題を解決するために、農研
17 機構は、効果的・効率的な業務運営の下、研究開発成果の利活用を見据えた基礎的な研究
18 開発から応用・実用化までの研究開発を総合的に推進し、優れた成果を創出するとともに、
19 それらを広く社会に移転する。さらに、普及・活用状況を研究開発にフィードバックし、
20 成果の実用性・完成度を高めることで、研究資源の投入に対して最大限の成果を得ること
21 に努める必要がある。一方で、第 3 期中期目標期間内に不適正な経理処理事案等が発生し
22 た事態を重く受け止め、内部統制の強化や職員のコンプライアンス意識の向上に全力で取
23 り組むことが必要である。

25 (4) 期間中における重点事項

26 農研機構は、「農林水産研究基本計画」を実現するための中核的な研究機関として、農
27 政上の技術的課題に対応する必要がある。また、独立行政法人改革の精神を踏まえ、研究
28 開発成果の最大化を目指す必要がある。このため、平成 28 年度から始まる中長期目標期間
29 においては次の点を特に重視し業務を行うこととする。

30 ① 研究開発成果の最大化に向けた研究マネジメント改革

- 31 ・中長期計画やその達成のための研究課題は、農業や食品産業等の現場や政策ニーズ
32 を起点とし、具体的成果を見据えて設定する。また、現場で活用される技術の創出
33 を図るため、研究推進における農業者や実需者等の関与を強化する仕組みを構築・
34 運用する。
- 35 ・ICT・ロボット、ゲノム育種等の分野を中心に府省、業種等の枠を超えた研究開発と
36 成果の商品化・事業化等に取り組む。また、農林水産省が行う「『知』の集積と活

1 用の場」*の取り組みと連携しイノベーション創出を目指す。

- 2 ・地域農業研究センターを新法人のフロントラインと位置付け、産学官連携機能を強
- 3 化するとともに、他の研究機関、普及機関、生産者等と連携し地域の課題に対処す
- 4 る。
- 5 ・海外の研究機関等との連携を強化し、地球規模の様々な研究課題等に対処する。ま
- 6 た、農林水産物の輸出に貢献する研究を強化する。
- 7 ・権利化・秘匿化・公知化・標準化、特許等の開放、独占的な実施許諾などの選択肢
- 8 を視野に入れ、最も適切な方法を採用し、研究開発成果の事業化を推進する。

9

10 ② 農政の方向に即した研究開発の推進

- 11 ・生産現場等が直面する問題を速やかに解決するための研究開発を最優先の研究課題
- 12 と位置づけ推進する。中長期的な戦略の下で着実に推進すべき研究開発についても
- 13 計画的かつ体系的に展開する。
- 14 ・重点化する研究課題ごとに、研究開発成果の移転に向けた研究等（現地実証試験等）
- 15 を行い、迅速な普及・実用化を目指す。

16

17 ③ 国立研究開発法人の再編・ガバナンス強化への対応

- 18 ・法人統合を契機に、基礎から応用・実用化まで一貫した研究を効果的・効率的に推
- 19 進する体制を構築する。また、つくば地区等の管理業務、ほ場業務等について可能
- 20 なものの一元化等を進める。
- 21 ・理事長のリーダーシップの下、役員による迅速・的確な意思決定を行う。また、リ
- 22 スク管理、コンプライアンス推進体制の強化等を行う。

23

24 第2 中長期目標の期間

25 中長期目標の期間は、平成28年4月1日から平成33年3月31日までの5年間とする。

26

27

28

29 第3 研究開発の成果の最大化その他の業務の質の向上に関する事項

30 <共通事項>

31 3-1. ニーズに直結した研究の推進とPDCAサイクル*の強化

32 (1) ニーズに直結した研究の戦略的展開

33 中長期計画やその達成のための研究課題の設定に当たっては、農業や食品産業等の現場

34 や政策ニーズを起点とし、具体的成果につながるようバックキャストアプローチ*を行う。

35 また、研究課題の進捗管理のため、法人一体として研究工程表を作成し、その活用を図る。

36 研究課題の評価は外部有識者等を活用し成果のユーザーの意見も踏まえ、自ら厳格に実施

1 する。評価結果に基づく「選択と集中」を徹底し、研究の進捗状況、社会情勢の変化、ユ
2 ーザーの意見等に応じ機動的に研究課題の見直しを行うとともに、社会実装の可能性が低
3 下した研究課題は変更や中止を行う。

4
5 農業や食品産業等の現場で活用される技術の創出を図るため、研究推進における農業者
6 や実需者等の関与を強化する仕組みを構築・運用する。また、現場ニーズに係る情報を定
7 期的に収集し、機動的に課題化する体制を構築する。さらに、民間企業を含む国内外の研
8 究開発情報を積極的に収集し、研究管理に活用する。

9 10 (2) 法人一体の評価と資源配分

11 農研機構がその役割を遂行するにあたり、限られた予算、人員等を法人全体で有効に活
12 用し、最大限の成果を得ることが重要である。このため、法人全体を俯瞰して厳格な評価
13 を行い、予算・人員等の資源を的確に配分するシステムを構築・運用するなど PDCA サイク
14 ルを強化し運用する。

15 また、運営費交付金を効果的に活用するとともに、中長期目標に即した研究開発の一層
16 の推進を図るため、外部資金の獲得に積極的に取り組み、研究資金の効率的活用を努める。

17 主務大臣による評価結果等については確実に業務運営に反映させる。

18 19 20 **3-2. 異分野融合・産学官連携によるイノベーション創出**

21 (1) 異分野融合研究*の強化

22 既存の研究分野の枠を超えた共同研究や、その研究開発成果の商品化・事業化に取り組
23 む事業者等との連携により、革新的な技術シーズを生み出すとともに、新たな市場を切り
24 拓く「イノベーション」の創出が期待されている。このため、特に、我が国の産業の強み
25 である ICT やロボット技術、最近目覚ましい発展を遂げている分子生物学やゲノム工学技
26 術等の分野を中心に、府省、研究分野、業種等の枠を超えた研究開発と成果の商品化・事
27 業化等に、従来以上のスピード感を持って取り組む。なお、農業のスマート化*等に伴って
28 集積するビッグデータ*に関しては、その有効活用を図るとともに適切な取扱に留意する。

29 また、農林水産省が行う「『知』の集積と活用場」を積極的に活用し、開発技術の普
30 及促進・技術移転等を進める。

31 32 (2) 産学官連携の戦略的推進

33 外部の知識・技術等を積極的に活用し、それらと農研機構の技術を組み合わせた上で革
34 新的な技術を生み出すとともに、開発した技術の移転・普及を促進するため、民間企業な
35 ど外部機関と積極的に交流を図り、産学官連携の取組を推進する。これにより、農研機構
36 が中核となって、他の研究機関の勢力や英知を結集し、我が国の農業研究を牽引する。

1 その際、法人として戦略的に産学官連携を推進する仕組みを整備し、ニーズ指向の研究、
2 マーケットインの発想による研究を推進する。また、資金提供型共同研究*など民間企業か
3 らの研究資金の拡大に向けた努力を行う。それらの取組を通じて、農研機構の各内部研究
4 組織*で開発された有望な研究開発成果が全国各地域で活用されるよう進める。

7 **3-3. 地域農業研究*のハブ機能*の強化**

8 地域農業研究センターが、地域の研究機関、普及機関、生産者、流通・加工業者など実
9 需者、民間企業等を結ぶハブとして、温暖化適応研究や機械開発など、地域の研究ニーズ
10 を収集し、地域農業が抱える問題解決に果敢に対応するとともに、農研機構の研究開発成
11 果の技術移転と現地適応度を高めるための普及組織等と連携したフィードバック研究*を
12 推進する。このため、特に、各地域農業研究センターの研究体制を整備するとともに、地
13 域に存する産学連携支援機関との連携にも配慮しながら産学官連携の取組を強化する。ま
14 た、地域農業研究センターが多様な課題に対応できるよう、本部やつくば地区をはじめと
15 した専門研究組織等との連絡と協力の体制を整備する。

18 **3-4. 世界を視野に入れた研究推進の強化**

19 世界的な人口増加や気候変動問題、国境を越えた家畜伝染病のまん延等、今日、地球規
20 模の様々な問題が深刻化する中で、農業研究においても国際的な協調・連携の下で推進す
21 べき研究課題が増えつつある。また、高品質な我が国の農産物の輸出や関連産業のグロー
22 バル展開の促進を技術面でサポートすることも重要性を増している。

23 このような状況を踏まえ、国際的な研究ネットワークに積極的に参画するとともに、海
24 外機関、国際機関等と積極的に連携し、研究開発の効果的・効率的な推進、地球規模の課
25 題に対する国際貢献等を行うとともに、農研機構の国際的プレゼンスの向上を図る。

26 また、農林水産物の国別・品目別輸出戦略や農林水産省が主導するグローバル・フード
27 バリューチェーン戦略*に貢献する研究や調査など我が国農業の海外展開に資する研究開
28 発を積極的に推進する。さらに、農業機械の安全性や環境性能、作業機械との通信規格な
29 ど国際標準化の動きに対し、行政や関係団体・機関等と密接に連携しながら適切に対応す
30 る。

31 こうした取組を行う際、開発途上国・地域等に関する対処等を効率的に行うため、国立
32 研究開発法人国際農林水産業研究センター（以下「JIRCAS」という。）との協力関係を強化
33 する。

36 **3-5. 知的財産マネジメントの戦略的推進**

1 (1) 知的財産マネジメントに関する基本方針の策定

2 「農林水産研究知的財産戦略」(平成〇〇年〇月〇日農林水産技術会議決定)等を踏ま
3 え、農研機構における知的財産マネジメントに関する基本方針を策定する。

4
5 (2) 知的財産マネジメントによる研究開発成果の社会実装の促進

6 研究開発成果を農業や食品産業等の現場での活用に結びつけ、その効果を迅速に社会実
7 装していくため、商品化・事業化等に有効な知的財産の取扱方針を描いた上で、研究開発
8 の企画・立案段階から終了後の成果の普及までの一連の過程において、以下のとおり戦略
9 的な知的財産マネジメントに取り組む。

10 ① 発明時における権利化・秘匿化・公知化・標準化や、権利化後の特許等の開放ある
11 いは独占的な実施許諾等の多様な選択肢を視野に入れ、事業の成功を通じた社会実装
12 を加速化する観点から最も適切な方法を採用する。

13 ② 知的財産の組み合わせによる成果技術の保護強化、知的財産権の群管理等の取組を
14 推進する。

15
16
17 **3-6. 研究開発成果の社会実装の強化**

18 (1) 研究開発成果の公表

19 研究開発成果については、研究成果情報、学術雑誌等への論文掲載等により積極的に公
20 表する。その際には、権利化の可能性、秘匿化の必要性等を十分検討する。

21
22 (2) 技術移転活動の推進

23 前中期目標期間までに得られた研究開発成果を含め、有望な研究開発成果について、ユ
24 ーザーが使いやすい形や国民が理解しやすい形での紹介を行う。また、研究後半の段階で
25 は、農家は場等で実証試験などを行い、研究成果の現場適用の可能性を見極めるとともに
26 技術移転を進める。

27 農研機構として、農業、食品産業その他の関連産業や国民生活の質の向上への貢献の観
28 点から特に普及が期待される重要な研究開発成果を、行政側とも連携しつつ選定し、重点
29 的に技術移転活動を行う。その際は、必要に応じ、都道府県の普及組織との役割分担を行
30 った上で、農研機構及び研究者自らが、生産者、実需者、民間企業等への技術移転活動を
31 行う。

32
33 (3) 規制対応研究の一体的実施

34 研究開発成果の円滑な社会実装を図るためには、研究開発から産業化・普及までの全体
35 を俯瞰して、それぞれの過程で生じるであろう課題に体系的・計画的に対応するアプロ
36 ーチが必要となる。しかしながら、これまでは研究開発成果を得ることのみに力が注がれ、

1 それら研究開発成果を産業化・実用化するために求められる各種規制への対応の視点や取
2 組が弱く、結果としてそれら規制の壁に阻まれ、研究開発成果を円滑に社会実装できない
3 事例が存在した。

4 このため、研究開発成果の商品化・事業化までの道行きを見通した上で、食品安全規制、
5 農薬・肥飼料・動物医薬品等の生産資材規制、労働安全規制、生物多様性影響等に関する
6 各種規制が適用される可能性を事前に分析し、その対処方法も含めて研究開発と規制対応
7 研究とを一体的に実施する。

9 (4) 広報活動の推進

10 我が国最大の農業・食品産業研究機関として、我が国の農業・食品産業の発展に資する
11 研究情報や成果を、ユーザーが使いやすい形でマスメディアやウェブサイト等を活用して、
12 的確に発信する。また、信頼できる農業研究機関として国民に広く認知されるよう、広報
13 活動のあり方を的確に見直す。

15 (5) 国民との双方向コミュニケーション*

16 農研機構及び研究者自らが、シンポジウムやイベント、学校教育や市民講座に参加する
17 こと等により、国民との継続的な双方向コミュニケーションを進める。これにより、研究
18 開発のニーズ、研究開発に対する期待や不安、懸念等の声を把握し、研究にフィードバッ
19 クして、真に国民生活の向上に役立つ研究開発成果の獲得を目指す。併せて、農業研究や
20 農研機構の研究開発成果への理解を促進する。

21 特に、農産物・食品の安全性や遺伝子組換え技術等の先端技術を応用した品種開発等に
22 当たっては、科学的かつ客観的な情報を研究開発段階から継続的に発信し、双方向コミュ
23 ニケーション活動の充実を図る。

25 (6) 研究開発成果の中長期的な波及効果の把握と公表

26 農業研究の成果が社会に広く普及し大きな波及効果を及ぼすには、通常長い年月を要す
27 る。このため、過去の研究開発成果の社会への貢献についてできるだけ定量的に実績を把
28 握し、その結果を公表するとともに、社会に貢献する研究開発成果の創出を常に強く意識
29 して業務を進める。

32 3-7. 行政部局との連携強化

33 農林水産省の行政部局と研究計画段階から密接に連携し、レギュラトリーサイエンス*に
34 属する研究など行政部局のニーズを十分に理解して業務を進めるとともに、行政ニーズに
35 迅速かつ機動的に対応し、業務を着実に実施する。また、緊急時対応を含め連携会議、専
36 門家派遣に対応するとともに、行政部局との協働によるシンポジウム開催等を行う。

1 また、災害対策基本法（昭和 36 年法律第 223 号）等に基づく初動時の対応、二次災害防
2 止等の技術支援を行うほか、食品安全基本法（平成 15 年法律第 48 号）に基づく農産物・
3 食品の安全及び消費者の信頼確保に向けての技術支援、人獣共通感染症、家畜伝染病予防
4 法（昭和 26 年法律第 166 号）等に規定される監視伝染病等に対する防除技術支援等により
5 行政に貢献する。

8 **3－8．専門研究分野を活かしたその他の社会貢献**

9 農研機構の高い専門知識、技術等が必要とされる分析及び鑑定、講習及び研修の開催、
10 外部機関からの研修生の受入れ、国際機関や学会への専門家の派遣等の協力、家畜及び家
11 きん専用の血清類及び薬品の製造及び配布、外部精度管理用試料の配布及び解析等を行う。

14 **<個別事業>**

15 **3－9．農業研究業務の推進（試験及び研究並びに調査）**

16 「農林水産研究基本計画」に即し、生産現場等が直面する問題を速やかに解決するため
17 の研究開発を最優先課題と位置づける。また、中長期的な戦略の下で着実に推進するべき
18 研究開発とともに、以下に示すような研究開発を基本的な方向として、研究開発を計画的
19 かつ体系的に展開する。

20 ① 生産現場の強化・経営力の強化

21 生産現場等が直面する問題を速やかに解決するための研究開発や、農業の生産流通
22 システムを革新し、大幅なコスト削減を実現する研究開発

23 ② 強い農業の実現と新産業の創出

24 農産物の単収・品質向上を促進し、「強み」をさらに引き伸ばす研究開発や、農村
25 に新たな産業や雇用を生み出す研究開発

26 ③ 農産物・食品の高付加価値化と安全・信頼の確保

27 安全で信頼され付加価値の高い農産物・食品の安定供給や、国民の健康長寿に貢献
28 する研究開発

29 ④ 環境問題の解決・地域資源の活用

30 農業の持続化・安定化を図る研究開発や、地球規模の食料・環境問題に対処する研
31 究開発

32 これらの研究開発については、地域の実態や生産者、消費者及び実需者のニーズを踏ま
33 えつつ、公設試、普及組織、行政機関、大学、民間企業等との連携・協力の下で効率的に
34 推進するとともに、研究開発成果を社会実装する取組を行う。

35 加えて、こうした基本的な方向に即して将来のイノベーションにつながる技術シーズの
36 創出を目指すために重要な基礎・基盤的な研究開発（目的基礎研究*）を適切なマネジメン

1 トの下、着実に推進する。

2 これらのことを実現するため、「別添1」に示した研究開発を進める。

5 **3-10. 種苗管理業務の推進**

6 (1) 業務推進の基本方針

7 農業の生産性を高め、農産物の品質の向上を図るためには、優良な種苗の生産・流通が
8 不可欠である。このため、適正な品種登録の実施及び優良な種苗の流通の確保を図るため
9 の種苗の管理を総合的に行う種苗管理センターを置く。

10 業務運営は、品種登録制度の公正性・信頼性の確保の必要性等も考慮し、理事長及び副
11 理事長以外の代表権を有する役員の下で以下及び別添2に示した業務を行う。

12 (2) 農林水産植物*の品種登録に係る栽培試験等

13 農林水産植物の品種登録に係る栽培試験は、種苗法(平成10年法律第83号)に基づき実
14 施するものであり、「農林水産省知的財産戦略2020」(平成27年5月28日農林水産省公
15 表)等を踏まえ、育成者が国内外において育成者権を取得しやすい環境を整備することが
16 重要なことから、品種登録審査の国際調和を推進するとともに、品種登録審査を着実に推
17 進するための栽培試験を確実に実施する。また、侵害相談、品種類似性試験等の育成者権
18 の侵害対策及び活用促進を行う。

19 (3) 農作物(飼料作物を除く。)の種苗の検査、指定種苗の集取、立入検査等

20
21 我が国の優良な種苗の流通を確保するため、種苗法に基づく指定種苗の検査を確実に実
22 施する。また、国際的な種子流通の活性化に対応するため、依頼検査を実施するとともに、
23 依頼者のニーズに即した検査項目の拡大を図る。

24 (4) ばれいしょ及びさとうきびの増殖に必要な種苗の生産、配布等

25
26 ばれいしょ及びさとうきびは、畑作振興上の重要な基幹作物である一方、増殖率が低く、
27 病害虫に弱いことから、健全無病な種苗を安定的に供給するため、種苗生産は、原原種(種
28 苗管理センター)、原種(道県)及び採種(農協)の3段階増殖体系を基本とする。

29 原原種については、農林水産省が定めた「ばれいしょ原原種及びさとうきび原原種配布
30 要綱」(昭和62年4月1日農産園芸局長通知)等に基づき種苗管理センターが道県の需要
31 量に即した健全無病な種苗を確実に生産し、配布するものとする。

32 (5) 種苗管理業務に係る研究開発成果の現場への橋渡し等

33
34 研究開発部門と連携して種苗管理業務に係る新技術の導入や新品種の普及促進を図ると
35 ともに種苗に関する情報提供等を行う。

1
2 なお、種苗管理センターの業務に関する調査研究については、「3-9. 農業研究業務
3 の推進」の研究推進・評価体制に組み入れる。

6 3-11. 農業機械化の促進に関する業務の推進

7 (1) 業務推進の基本方針

8 「食料・農業・農村基本計画」や「農林水産研究基本計画」等に即して生産現場が直面
9 する問題の速やかな解決と生産流通システムの革新による大幅な生産性の向上、新たな価
10 値の創出等に資するため、ロボット技術や ICT 等の先端技術の活用を一層図りつつ、農業
11 機械化促進法（昭和 28 年法律第 252 号）に基づく、農業機械に関する試験研究や検査・鑑
12 定等の業務を総合的かつ効率的に実施する。

13 併せて、農作業の安全に資する情報収集・分析とそれを踏まえた農業機械の開発及び評
14 価試験の高度化、農業用ロボットの性能や安全性確保に関する評価手法の確立を図る。

15 (2) 研究の重点化及び推進方向

16 ① 高性能農業機械等の試験研究の推進

17 農業機械化促進法に基づく「高性能農業機械の試験研究、実用化の促進及び導入に
18 関する基本方針」（平成 25 年 5 月 16 日農林水産省告示第 1602 号、以下「基本方針」
19 という。）に即して、同法第 2 条第 5 項に規定する高性能農業機械等の試験研究とこ
20 れに資する基礎・基盤的研究を重点的かつ計画的に実施する。

21 これらのことを実現するため、別添 1 の 1. (2) に示した研究を農業研究業務と
22 協力分担して進める。

23 なお、研究の推進に当たっては、研究のステージに応じて研究評価（生産現場への
24 普及性の観点を含む）を適切に実施し、研究の実施に反映させるとともに、その評価
25 結果及び研究開発成果については、できるだけ定量的手法を用いて国民に分かりやす
26 い形で情報提供を行う。

27 ② 行政ニーズへの機動的対応

28 期間中に生じる行政ニーズに機動的に対応し、必要な研究開発を的確に実施する。

29 ③ 地域での農業機械開発への研究支援

30 都道府県（農業試験場や普及組織等を含む）や商工関係者、担い手、メーカー、関
31 係省庁など、関係者が参画した機械開発・改良の取組に対して、地域農業研究センタ
32 ーなど農業研究業務と協力分担して研究支援する。

33 (3) 効率的・効果的な研究開発を進めるための配慮事項

34
35 高性能農業機械等の試験研究を効率的・効果的に進めるため、以下の事項に配慮する。
36

1 研究課題の選定・実施に当たっては、生産現場のニーズに的確に対応するため、各地域
2 農業研究センターや行政部局等から現場ニーズに係る情報を定期的に収集し、機動的に課
3 題化する体制を構築するとともに、農業研究業務における作業技術や情報技術、農業経営
4 など関連する研究分野との連携を強化する。

5 また、スマート農業（ロボット技術や ICT を活用した超省力生産、高品質生産を実現す
6 る新たな農業）の実現に向けて、ロボット技術や ICT 等の異分野の技術を活用した先進的・
7 革新的な機械の開発や通信規格の標準化等の研究に異分野の研究機関等との連携も図りな
8 がら積極的に取り組む。このほか、電動化など将来的に必要なものの未確立の基盤技術に
9 ついては、大学や異分野の研究機関等と連携協力して、研究に取り組む。

10 なお、農業政策上で緊急的に措置が必要な課題については、迅速かつ柔軟に人的・経済
11 的資源を投入し、優先的に取り組む。

12 13 (4) 農業機械の検査・鑑定

14 ① 農業機械の開発・改良の促進や農作業の安全性の確保、環境保全に資するため、リ
15 スクアセスメントの考え方や検査・鑑定の実施結果等を踏まえて、検査・鑑定内容の
16 充実を図る。

17 なお、環境配慮の観点からは、農業機械の省エネルギー化や排出ガスなどの低減に
18 向けて積極的な対応を行う。

19 ② 申請者の利便性の向上に資するため、より効率的な検査の実施、事務処理の合理化
20 等により、成績書の早期提出に努める。

21 ③ このほか、農業機械の検査・鑑定の結果については、継続的にデータベースの充実
22 を図るとともに、インターネット等を通じ幅広く情報提供を行う。また、農作業事故
23 は、高齢者に多いことを考慮に入れ、農作業事故防止のための安全な農業機械の普及
24 促進や農作業安全対策の啓発に取り組む。

25 ④ 今後我が国の農業機械等の国際展開が進む中で、我が国農業機械が有する高い作業
26 性能、安全性能、環境性能等のグローバルスタンダード化を促進する観点から、農業
27 機械メーカー及びその団体等の協力を得て、OECD トラクターテストコード*など農業機
28 械に係る国際標準の設定等に関する議論に積極的に関与する。

29 30 (5) 農作業の安全に資する情報収集・分析とそれを踏まえた農業機械の開発及び評価試 31 験の高度化

32 農作業の安全確保を進めるためには、農業機械・装置の安全性の一層の向上を図ること
33 が必要である。高齢農業者、女性農業者、新規就農者の安全確保はもとより、農業経営の
34 急速な規模拡大により、農業機械の大型化、高性能化、中古農業機械の利用が進む中で、
35 中核的な担い手や雇用労働者の安全確保にも留意していく必要がある。

36 このため、行政部局、関係業界、労働安全分野の専門家等との連携の下、農作業事故の

1 実態をよりの確に把握・分析する体制を設け、その分析情報について、農業機械の安全設
2 計や安全利用に資するよう、農業機械メーカーや生産現場へフィードバックする。また、
3 分析情報を基に、メーカーによる改善に向けたリスクアセスメントの実施を促すとともに、
4 新たな機械開発に向けて、民間企業へのリスクアセスメントの助言指導などを行うほか、
5 安全性向上に向けたメーカー等での取組情報等を把握・共有し、事故分析や啓発活動に活
6 かしていく。加えて、事故分析結果については、農作業の安全の向上と健康障害の防止に
7 資する農業機械・装置の開発、作業負担の軽減に資する農業機械・装置の開発、機械・装
8 置の安全性や取扱いの利便性の向上に係る計測・評価試験手法の高度化のほか、優れた安
9 全性能を有する機種をより評価する仕組みづくりに活かしていく。

12 3-12. 生物系特定産業技術*に関する基礎的研究の推進

13 農林漁業、飲食料品製造業及びたばこ製造業等の成長産業化を図るため、「農林水産研
14 究基本計画」等、国が定めた研究戦略等に基づいて行う基礎的な研究開発を、大学、高等
15 専門学校、国立研究開発法人、民間企業等に委託することにより促進する。

16 特に、近年画期的な技術開発が進展している異分野の革新的技術の導入や、「『知』の
17 集積と活用」による技術革新を通じて、オープンイノベーションを推進し、基礎的な
18 研究開発を推進する。

19 研究開発の推進に当たっては、恒常的に管理運営に当たる担当者を配置するとともに、
20 外部の幅広い有識者の活用により研究機関の審査や採択後の評価等を透明性を確保しつ
21 行うための体制を整備する。

22 また、関係府省や他分野の研究支援機関との連携強化、関連情報の収集、支援対象とす
23 る研究機関等に対するマネジメント機能の発揮等を通じ、研究開発の環境整備を推進する。

26 3-13. 特例業務（民間研究促進業務に係る資金回収業務）

27 農山漁村の6次産業化等の生物系特定産業技術に関する実用化段階の試験及び研究を
28 民間企業等に委託した民間実用化研究促進事業（平成23年度以降は新規案件の採択を中
29 止）の資金回収業務を実施するに当たり、その研究成果の早期実用化と、当該業務の経理
30 を行う勘定の着実な繰越欠損金の解消を図るため、次の措置を講じる。

- 31 ① 効率的な体制に基づく効果的なマネジメントの実施
- 32 ② 各種技術展示会等を活用した研究成果の需要開拓等の実施
- 33 ③ 繰越欠損金の計画的な解消に向けた計画の策定と事業化の進捗状況を踏まえた計
34 画の見直し

36 第4 業務運営の効率化に関する事項

4-1. 業務の効率化と経費の削減

(1) 一般管理費等の削減

運営費交付金を充当して行う事業について、業務の見直し及び効率化を進め、一般管理費（人件費を除く。）については毎年度平均で少なくとも対前年度比3%の抑制、業務経費については毎年度平均で少なくとも対前年度比1%の抑制を行うことを目標とする。

(2) 調達合理化

「独立行政法人における調達等合理化の取組の推進について」（平成27年5月25日総務大臣決定）等を踏まえ、公正かつ透明な調達手段による、適正で迅速かつ効果的な調達を実現する観点から、毎年度策定する「調達等合理化計画」の中で、定量的な目標や具体的な指標を設定し、取組を着実に実施する。

特に、短期間で納入が必要な研究開発用物品について、調達に要する時間の大幅な短縮が可能となるよう、公正性を確認しつつ、迅速な調達方法の検討・導入を進める。

また、JIRCASなど他の独立行政法人との共同調達などの連携に積極的に取り組み、一層の効率化を図る。

4-2. 統合による相乗効果の発揮

(1) 組織・業務の再編

法人統合を踏まえ、相乗効果を最大限に発揮するとともに、人材、研究資金等の資源を法人全体として有効に活用することが重要である。このため、従来の組織の枠組みにとらわれずゼロベースで組織の見直しを行い新たな組織体制を構築する。特に、つくば地区の研究推進組織を再編し、基礎から応用・実用化までの一貫した研究体制により研究成果の創出・社会実装の加速化を図る。また、研究の進捗に応じ、機動的に研究推進体制を見直し研究者を配置できる仕組みを構築する。

業務についても見直しを行うとともに、効率化のため法人内の業務システムの整備を進める。特に、つくば地区において、管理業務やほ場業務等について可能なもの一元化、高度分析機器等の相互利用等を進める。また、テレビ会議システムやICTを活用した業務効率化を図る。

(2) 研究拠点・研究施設・設備の集約（施設及び設備に関する計画）

限られた予算・人員を有効に活用し長期的に研究開発成果の最大化を図るためには、将来の研究の重点化方向に対応するとともに、省エネルギーの推進や維持・管理経費の節減、安全確保等のための老朽化施設の更新を図る観点から、法人全体として、研究拠点・研究施設・設備を最適化することが重要である。このため、法人統合を踏まえたつくば地区の再編、地域の近接する研究拠点や小規模な研究拠点等の再編・見直しを進める。これらに

1 関しては、中長期計画に具体的な方向を明記し、可能なものは今中長期目標期間内に、必
2 要に応じ次期中長期目標期間にかけ実施を図る。

5 第5 財務内容の改善に関する事項

(1) 収支の均衡

7 適切で効率的な業務運営を行うことにより、収支の均衡を図る。

(2) 業務の効率化を反映した予算の策定と遵守

10 「第4 業務運営の効率化に関する事項」及び(1)に定める事項を踏まえた中長期計画
11 の予算を作成し、当該予算による運営を行う。

13 独立行政法人会計基準の改訂(平成12年2月16日独立行政法人会計基準研究会策定、
14 平成27年1月27日改訂)等により、運営費交付金の会計処理として、業務達成基準によ
15 る収益化が原則とされたことを踏まえ、収益化単位の業務ごとに予算と実績を管理する体
16 制を構築する。

17 一定の事業等のまとまりごと適切にセグメント*を設定し、セグメント情報の開示に努め
18 る。

(3) 自己収入の確保

21 受託研究等の外部研究資金の獲得、受益者負担の適正化、特許実施料の拡大等により自
22 己収入の確保に努める。特に、「独立行政法人改革等に関する基本的な方針」において、
23 「法人の増収意欲を増加させるため、自己収入の増加が見込まれる場合には、運営費交付
24 金の要求時に、自己収入の増加見込み額を充てて行う新規業務の経費を見込んで要求でき
25 るものとし、これにより、当該経費に充てる額を運営費交付金の要求額の算定に当たり減
26 額しないこととする。」とされていることを踏まえ適切な対応を行う。

(4) 保有資産の処分

29 現有の施設・設備について自主点検を行い、そのうち不要と判断されたもの及び利用率
30 の低いものについては積極的に処分する。

6 第6 その他業務運営に関する重要事項

6-1 法人のガバナンス強化

(1) 内部統制システムの構築

36 法人統合を踏まえ、農研機構の役割を効果的・効率的に果たすため、内部統制の仕組み

1 を高度化し運用する。

2 その際、理事長のリーダーシップと十分な情報共有の下、各役員の担当業務、権限及び
3 責任を明確にし、役員による迅速かつ的確な意志決定を行う。また、各業務について、役
4 員から現場職員までの指揮命令系統を明確化する。

5 特に、研究活動における不適正行為に関しては、第3期中期目標期間内に生じた不適正
6 な経理処理事案等の事態を重く受け止め、物品の適正な調達、その他のリスク管理等の対
7 策を徹底し、不適正事案の根絶に向け、内部統制の仕組みを強化する。

9 (2) コンプライアンスの推進

10 農研機構に対する国民の信頼を確保する観点から法令遵守を徹底し、法令遵守や倫理保
11 持に対する役職員の意識向上を図る。

12 研究活動における不適正行為については、政府が示したガイドライン等を踏まえ対策を
13 推進する。

15 (3) 情報公開・情報セキュリティの推進

16 法人運営の透明性を確保するため、情報公開を積極的に進める。

17 政府機関の情報セキュリティ対策のための統一的な基準群を踏まえ、個人情報保護や秘
18 匿化した技術情報の管理などを含め、情報セキュリティを確保する。

20 (4) 環境対策・安全管理の推進

21 化学物質、生物材料等の適正管理などにより研究活動に伴う環境への影響に十分な配慮
22 を行うとともに、エネルギーの有効利用やリサイクルの促進に積極的に取り組む。

23 安全衛生面に関わる事故等を未然に防止するための管理体制を構築するとともに、災害
24 等による緊急時の対策を整備する。

27 6-2. 研究を支える人材の確保・育成

28 (1) 人材育成プログラムの策定と実施

29 優れた研究者を確保・育成するとともに、研究の企画や評価、研究業務の支援や技術移
30 転、組織運営など様々な分野の人材を確保・育成するため、農研機構の人材育成プログラ
31 ムを策定し、それに基づく取組を実施する。

32 その際、優れた研究管理者を養成する観点を重視する。また、計画的な養成が期待され
33 る、研究業務の支援、技術移転活動等を行う人材を育成するためのキャリアパス*を構築す
34 る。

35 また、行政部局、公立試験研究機関等との多様な形での人的交流の促進、研究支援の高
36 度化を図る研修等により、職員の資質向上を図る。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

(2) 人事に関する計画

期間中の人事に関する計画を定め、業務に支障を来すことなく、その実現を図る。

その際には、職種にとらわれず適材適所の人員配置を行うとともに、多様な雇用形態や公募方式の活用を図る。特に、異分野融合研究等における他機関の技術シーズの活用や、産学官連携活動における先進的ノウハウの活用などによる農研機構の業務高度化のため、クロスアポイントメント制度*等も利用して積極的な人事交流を行う。

優秀な女性・若手職員を積極的に採用するとともに、女性の幹部登用、ワークライフバランス推進等の男女共同参画の取組を強化する。また、優秀な人材の確保に加え、研究活動の国際化等に資するという観点から、外国人研究者の積極的な採用に取り組む。

(3) 人事評価システムの構築と運用

法人統合を踏まえ、公正かつ透明性の高い職員の業績及び能力評価システムを構築・運用する。その際、研究職員の評価は、研究開発成果の行政施策・措置の検討・判断への貢献、研究開発成果が社会に及ぼす影響、現場ニーズの把握や技術移転活動への貢献、研究活動における不適正行為の有無等を十分勘案したものとする。

人事評価結果については、組織の活性化と実績の向上を図る観点から適切に処遇等に反映する。

(4) 職員の給与体系等の見直し

職員の給与については、職務の特性や国家公務員・民間企業の給与等を勘案した支給水準とする。

また、クロスアポイントメント制度や年俸制など研究業務の特性に応じたより柔軟な報酬・給与制度の導入に取り組むとともに、透明性の向上や説明責任の一層の確保のため、給与水準を公表する。

6-3. 主務省令で定める業務運営に関する事項

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の業務運営及び人事管理に関する省令（平成15年9月16日）に基づき、中長期計画に積立金の処分に関する事項を定める。

なお、施設及び設備に関する計画については4-2の(2)、職員の人事に関する計画については6-2の(2)に定める。

1 【別添1】研究開発の重点化方向と成果の社会実装

平成32年度末までに以下の研究開発等を行う。

1. 生産現場の強化・経営力の強化

生産現場等が直面する問題を速やかに解決するための研究開発

(1) 農業・農村の所得増大に向けて、地域が目指すべき営農システムの実現に向けた技術体系の確立

水田作については、担い手への農地集積など経営環境が変化する中で、担い手自らが市場動向や地域の立地条件を踏まえて、収益向上をめざして生産性の高い安定的な営農体系を確立できる技術開発が課題となっている。中山間地域に関しては、経営規模が小さく担い手の減少・高齢化が著しい状況の中でも高収益を得ることを可能にする技術開発が求められている。北海道の畑作・酪農地帯については高齢化等により離農する農家が増えることが見込まれており、担い手が従来の家族経営を基本とした枠を超えて経営規模拡大を図ることを可能とする技術体系を確立する必要がある。九州・沖縄地域の畑作・畜産地帯については、当該地域の環境条件や担い手の高齢化の進行等の制約の下でも収益性の高い営農を可能にする必要がある。

このため、水田作においては、生産コストの低減や収益性の向上を目指し、新品種の評価・利用技術の開発を行うとともに、水田転換畑における排水対策等の低コスト化とムギ類及びダイズの収量向上、家畜ふん堆肥等の投入による地力維持を可能とする新たな水田輪作体系及び野菜等を組み込んだ水田輪作体系を確立する【重要度：高】。また、コムギで500kg/10a、ダイズで250kg/10aの単収を目指し、農業者等が自らコムギ及びダイズの多収を阻害する要因を容易に診断し対策を講じることを可能にする技術を開発する。さらに、水田を活用した飼料用米等国産飼料の省力・低コスト生産及び大家畜への利用技術の開発を行う。中山間地域における高収益営農のためには、高品質な有機野菜や薬用作物等の高付加価値の作目や地域作物を組み合わせた水田複合経営を可能とする技術の開発を行う。北海道においては、テンサイの多収直播栽培技術や栄養価の高い飼料用トウモロコシ子実を生産・利用する技術等の開発を行い、大規模畑作経営体やコントラクター*等が省力的で安定して高品質な産物を生産可能な技術体系を確立するとともに、酪農経営を省力化・効率化できる技術体系を確立する。九州・沖縄地域については、カンショを中心とした高収益な機械化輪作体系及び地域飼料資源を活用した耕畜連携システムを確立するとともに、肉用牛経営の収益性を向上させる技術体系を確立する。上記の輪作体系や技術体系の確立にあたっては、併せて営農モデルの策定・検証を進め、その経営的な効果について明らかにする。

1 さらに、生産者・普及組織等と連携した現地実証試験を各地で実施し、地域条件に即し
2 た収益性の高い営農システムとして確立し、速やかな普及に向けた体制を整備する。また、
3 技術内容及び経営的効果についてまとめた農業者及び農業指導者向けの分かりやすいマニ
4 ュアル等を作成し、速やかに生産現場への普及を図る。

7 生産流通システムを革新し、大幅なコスト削減を実現する研究開発

8 (2) 農業のスマート化*を実現するための革新工学技術の開発

9 今後、農業従事者の減少・高齢化と担い手への農地集積が一層見込まれる中で、長年の
10 経験や勘に頼らなくとも新規就農者や女性など誰もが高品質な農産物を生産できる取り組
11 みやすい農業や、農作業の超省力化によりこれまでの規模拡大の限界を突破する大規模経
12 営を実現、さらに、中山間地域における地域資源や生産基盤を維持するため、革新的な農
13 業生産システムの確立に向けた研究開発の推進が重要な課題となっている。また「ロボッ
14 ト革命実現会議」でとりまとめられた「ロボット新戦略（平成 27 年 1 月 23 日ロボット革
15 命実現会議策定）」においても、2020 年までに農業のスマート化に向けた自動走行トラクタ
16 ーの現場実装や農業・食品産業分野において省力化などに貢献する新たなロボット 20 機種
17 以上の導入が目標として設定されており、この実現に向けた研究開発の推進が求められて
18 いる。加えて、高水準で推移する農作業死亡事故への対応等農作業安全に資する調査・研
19 究や、省エネルギー化、低炭素化等に対応する環境負荷低減技術の開発も求められている。

20
21
22 このため、ICT 及びロボット技術等を積極的に活用し、複数の農業機械が協調しながら作
23 業する技術、多数のほ場における農作業を効率化するための営農管理技術、ほ場ごとの生
24 育情報など農業ビッグデータ*の構築と解析及びこれに基づいた品質及び収量の向上技術、
25 ロボットの安全性確保策を評価する手法等、革新的な農業生産システムの基盤技術等を開
26 発する。また、大規模化する土地利用型農業の輪作体系や中山間地における機械化一貫体
27 系に対応した、低コストで、省力、高能率、高耐久な機械・装置の開発、野菜・果樹等園
28 芸特産物の生産性向上及び高付加価値化及び酪農等畜産の省力・安定生産に資する農業機
29 械・装置・施設を開発する。特に、これまで開発を進めてきた、土地利用型農業において
30 ほ場を自動走行するトラクターや畦畔法面で自走して草刈りができる除草ロボット等につ
31 いては現場実装を実現する。

32 加えて、農作業事故の調査・分析に基づく、安全性の高い農業機械の開発・改良、省エ
33 ネルギー化や再生可能エネルギー利用促進に資する技術、機械の開発及びこれら技術の評
34 価試験方法の開発を着実に推進する。

1 なお、研究開発の推進に当たっては、栽培体系など生産システムの最適化が図られるよ
2 う、栽培技術や品種改良などの研究と連動して、機械開発を進める。また、これらの研究
3 課題において、農研機構の研究勢力を結集することはもとより、ICT及びロボット分野等の
4 異分野企業との連携、さらに、行政部局との連携、地域の研究機関・生産者・普及組織等
5 における実証研究との連携を強化することで成果の速やかな実用化を図る。

7 **(3) 畜産現場強化のための生産システムの確立**

8 後継者不足や重労働、輸入飼料の高騰等を背景に畜産農家戸数の減少が続いており、畜
9 産経営の省力化や生産コストの低減、生産性を飛躍的に高める新たな生産システムの確立
10 が課題となっている。また、国産畜産物の競争力強化のために、消費者への訴求点を明確
11 化した新たな差別化技術の開発が求められている。地域住民から畜産経営への苦情の6割
12 を占める家畜排せつ物の臭気低減も課題である。

13
14 このため、肉用牛や中小家畜への高栄養国産飼料の給与技術の開発を行うとともに、周
15 年放牧のための草地・家畜管理技術の開発を行う。また、ロボットやセンシング技術の活
16 用により個体情報を収集し、家畜飼養管理を省力化・精密化する新たな生産システムを確
17 立するとともに、人工授精用精液の能力判別技術の開発や家畜の健全性を高めること等に
18 より生涯生産性を向上させる技術の開発を行う。畜産物については、差別化のための新た
19 な品質評価手法と生産技術の開発を行う。家畜排せつ物の臭気低減に関しては、ふん尿処
20 理過程における悪臭発生の低減技術の開発を行う。

21
22 さらに、これらの技術開発で得られた成果については、生産者・普及組織・公立試験研
23 究機関等と連携に基づいた現地実証試験を実施することにより収益性の高い生産システム
24 として確立し、速やかな普及に向けた体制を整備する。特に、放牧関連の研究成果に関し
25 ては、耕作放棄地で現地実証を行う。畜産物の差別化及び家畜排せつ物からの臭気低減に
26 ついては、技術マニュアル等の作成や講習会の開催等によって生産者及び関係事業者に周
27 知することにより普及を図る。

2. 強い農業の実現と新産業の創出

農産物の単収・品質向上を促進し、「強み」をさらに引き伸ばす研究開発

(4) 農産物の「強み」を強化するための先導的品種育成及び育種基盤技術の開発

農産物の消費拡大や生産コストの低減のためには、消費者、実需者、及び生産者のニーズに対応した「強み」のある農産物づくりが求められている。これらの農産物を日本各地に次々と生み出すためには、実需者や生産者等の関係者と連携したマーケットイン型育種*により、「強み」のある品種を効率的に育成・普及することが不可欠とされている。また、生産者の高齢化が進み、生産基盤が脆弱化する中、これまで以上に栽培しやすい品種を育成・普及することが必要とされている。

このため、実需者等のニーズに対応した先導的品種の育成等に向けて、我が国の農業分野における遺伝資源に関するナショナルセンターとして、国内外の遺伝資源を収集・特性評価・保存・配布するとともに、農作物のゲノム情報に基づいて重要な農業形質に関わる遺伝子の同定・マーカーの作成及び育種素材の開発を行う。これらを利活用しながら、加工適性、複合病害抵抗性、広域適応性を持つムギ類・ダイズ・イネ、良食味多収稲や高温登熟耐性の高いイネ、ヒ素を吸収しにくいイネ、10a 当たり 1t を超える高い収量性と病虫害抵抗性を併せ持つ飼料用に適するイネ、高品質多収な飼料作物、シストセンチュウと病害への抵抗性を併せ持つバレイショ、ネコブセンチュウ等の病虫害抵抗性を持つカンショ、台風や干ばつに強い特性等を持つサトウキビ、病害抵抗性に優れるテンサイ、高品質で多収のソバ・ナタネ等の世界に誇れる強みのある先導的品種を育成する。また、画期的な農作物の開発に向けて新たな育種技術を開発するとともに、多収に関わる遺伝子を導入・改変することにより 10a 当たり玄米重量で 1.5t 程度の極めて高い収量性を持つイネ育種素材を開発する【難易度：高】。

さらに、実需者、生産者、普及組織等の品種への理解を深めるために、現地実証試験を各地で実施するとともに必要に応じて種苗の増殖を行い、速やかな品種の普及を図る。また、ニーズに沿った育種素材やマーカーの開発・提供ならびに解析支援等を通じて、都道府県や民間企業の品種育成を積極的に支援する。

農村に新たな産業や雇用を生み出す研究開発

(5) 農業生物の機能解明に基づいた生産性向上と産業利用のための技術開発

今後も国内で安価な輸入農産物との競争に打ち勝つことができる農産物を供給していくためには、品質を損ねることなく単収をさらに高めて生産コストを引き下げることや、機能性等の新たな付加価値を付与した画期的な新品種を育成することが重要である。このため、農作物の潜在力を引き出すための農業生物の機能解明や新品種育成のための基盤技術

1 の開発を行う必要がある。また、農業従事者の高齢化に伴い、農地・森林の荒廃や定住基
2 盤の崩壊が懸念される中、中山間地域等に活力や賑わいを取り戻すためには、地域資源等
3 を活用したイノベーションを起こし、新たな産業や雇用を生み出すことが重要である。

4
5 このため、広範な農作物等についてゲノム情報の高度な解読や生産性等を制御する遺伝
6 子の機能解析、生物間相互作用の解明を加速化し、遺伝子組換え、ゲノム編集*、オミクス
7 解析*等の技術を組み合わせて、生産性向上・有用形質付与のための基盤技術を開発する。
8 また、機能性素材等の開発や医薬品・機能性成分等の有用物質の植物やカイコ等での生産
9 技術を開発する。

10
11 さらに、開発された基盤技術と素材に関しては、社会実装の具体的な姿を想定して研究
12 開始時に策定する知財戦略に従い、これらの研究開発成果を民間事業者等に移転すること
13 により、速やかな普及を図る。特に組換え植物やカイコを用いて医薬品や機能性素材等を
14 生産する技術に関しては、臨床研究や現地実証試験を可能な限り民間事業者を含む関係機
15 関と連携して実施し、これらの研究成果を民間事業者等に移転することにより、速やかな
16 産業化を目指す。

3. 農産物・食品の高付加価値化と安全信頼の確保

安全で信頼され付加価値の高い農産物・食品の安定供給や、国民の健康長寿に貢献する研究開発

(6) 園芸作物の次世代型生産・流通・加工技術体系の確立

国内外での需要の拡大を図るため、消費者や実需者のニーズに対応した品種の育成と、品種特性に応じてきめ細やかな品質管理を可能とする生産・加工技術等の開発が求められている。また、農業従事者の減少・高齢化がさらに深刻化すると予想される中、園芸農業を維持できるようにするためには、規模拡大を図り、省力化を実現する生産技術の開発が必要である。さらに、エネルギーコストの増加が経営を圧迫する中、高温・多湿な我が国の気候に対応しつつ省エネ・省力・高収量を一体的に実現する生産システムの確立が必要である。

このため、加工・業務用需要に適した品種、健康機能成分に富んだ品種、温暖化の進行に備えた品種、良日持ち性や病害虫抵抗性の品種等を育成するとともに、品種特性に応じた高品質安定生産・加工技術等を開発する。野菜・花きについては、民間や都道府県の育種を下支えするための先導的品種・中間母本を育成する。また、施設園芸においては、省エネ・高品質・高収量を一体的に実現するため、施設栽培環境に適した品種と高度環境制御や地中熱等を利用した生産システムを確立する。さらに、果樹・茶については、新たな作業機械等の活用による省力化・軽労化技術等を開発する。特に、加工用リンゴ栽培については、省力樹形と摘果剤等の活用により、労働時間を生食用慣行の1/3に削減する。日持ちが短く問題となっている花きの品目については、良日持ち性品種と品質保持期間延長技術により切り花の品質保持期間を現状の2倍に延長する技術を開発する。

さらに、選抜段階から実需者の意見を取り入れたマーケットイン型育種と生産者・普及組織・公立試験研究機関等との連携に基づいた現地実証試験等を実施するとともに、必要に応じて母樹の増殖を行い、新品種の速やかな普及を目指す。また、栽培・加工技術についても地域農研のハブ機能等を活用することにより、生産者、加工業者等の技術のユーザーの意見を取り入れながら、技術の実用性の確保、現地実証試験等を適切に行い、迅速な技術移転を図る。

(7) 新たな国内需要への対応、6次産業化及び輸出促進のための食品の品質・機能性評価及び加工・流通技術の開発

国民の健康意識が高まり、食による健康維持・増進の実現への期待が膨らむ中、健康維持・増進効果に対する科学的根拠のある高栄養・健康機能性の農産物・食品を開発し、食生活を通じて国民の生活の質を一層向上させる等、農産物の新たな付加価値の創出に貢献

1 する研究開発が求められている。また、和食の海外普及や世界の食市場の拡大が見込まれ
2 る中、グローバル・フードバリューチェーン戦略に対応した農産物・食品の輸出拡大や海
3 外市場における食品産業の活動を支援する研究開発が必要とされている。

4
5 このため、ムギ類、ダイズ、米、野菜等の農産物や乳製品、発酵食品等が持つ健康機能、
6 栄養及び美味しさ（食品の3つの機能）に関する科学的知見を獲得・充実させることによ
7 り、生活習慣病・老化予防効果、免疫機能向上効果等の多様な高栄養・健康機能性の農産
8 物・食品を開発する。農産物・食品の輸出拡大や通年供給のための新たな鮮度保持・長期
9 貯蔵技術、輸送技術を開発するとともに、国際規格等に対応した栽培方法・加工技術や品
10 質評価手法を開発する。

11
12 さらに、食農ビジネスにつながる連携・普及活動と手法開発を同時に行い、消費者や関
13 連企業のニーズに直結した連携・普及・研究を一体的に推進する。地域のハブとなる地域
14 農業研究センターと普及のためのノウハウを共有する等、連携を強化することにより、得
15 られた研究成果の速やかな普及を図り、6次産業化及び輸出の促進に貢献する。

16 17 18 **（8）食品の安全性・信頼性向上及び農業生態系における化学物質等による汚染リスク低** 19 **減技術の開発**

20 今後の国内外の経済社会情勢の変化に応じた、食品の安全性向上のためのシステムを確
21 立するため、科学の進歩によって新たに確認される危害要因も含め、農作物の生産・流通
22 から食品の加工・販売に至る様々な危害要因の健康へのリスクを低減することが求められ
23 ている。加えて、消費者及び生産者の利益を保護することにより、農林水産業や関連産業
24 の発展を促すことが求められている。

25
26 このため、コーデックス委員会*における国際的な実施規範や基準値策定に向けた動き等
27 も考慮し、米のヒ素濃度を低減するための技術開発のほか、穀物中のカビ毒、加工食品の
28 アクリルアミド及び農業環境中の残留性有機汚染物質等の有害化学物質並びに腸管出血性
29 大腸菌 0157、カンピロバクター等の有害微生物といった危害要因に対するリスク管理に役
30 立つ技術の開発、中小食品事業者の HACCP*の取組を支援するためのリスク管理技術の開発
31 等を行う。また、食品の信頼性確保のため、これまでに開発した米、ネギ等農産物に加え、
32 加工食品についても、もちやゆで野菜等の加工度の低い原材料から順次、品種・産地偽装
33 等の監視・取締りに資する産地判別技術等の開発を行う。

34
35 さらに、これらの技術開発で得られた成果は、行政部局が作成する実施規範や管理マニ
36 ュアル等に反映させる。リスク管理に役立つ技術は都道府県の公立試験研究機関や普及組

1 織等と協力して実証試験を各地で実施し、地域条件に応じた技術を確立する。また、リス
2 ク検出技術は活用現場を見据えた開発を行い、民間企業に技術移転する等、速やかな社会
3 実装を行う。一方、食品の信頼性確保にかかる産地判別技術等は、農林水産消費安全技術
4 センター等と連携して普及を図る。

7 (9) 家畜疾病及び作物病虫害の防疫技術の開発

8 家畜防疫については、わが国の近隣諸国における口蹄疫や高病原性鳥インフルエンザな
9 どの家畜の伝染性疾病の侵入防止、国内で確認されているヨーネ病、牛白血病、牛ウイル
10 ス性下痢・粘膜病、豚流行性下痢、乳房炎等による損耗防止、気候変動に対する節足動物
11 媒介性感染症等への対応が求められている。また、植物防疫については、世界的な気候変
12 動や貿易の拡大等に伴い、新たな作物病虫害の侵入・まん延等が懸念されるとともに、国
13 内新興・再興病虫害のまん延防止が課題となっている。一方、農産物の輸出に際しては、
14 輸出先国の求める衛生条件等を満たすための体制を整備していく必要がある。

15
16 このため、近隣諸国で発生している家畜疾病については、諸外国と連携し、家畜疾病の
17 発生予防及び制圧に係る調査研究及び技術開発を実施するとともに、我が国に万が一侵入
18 した場合に備え、正確かつ迅速な診断法やまん延防止に係る技術を開発する。国内に常在
19 している家畜疾病に対しては、感染個体の早期発見技術の開発や診断・予防技術を高度化
20 するとともに、ワクチンや抗ウイルス薬を開発する。加えて、畜産農場における衛生管理
21 を向上させるため、農場 HACCP の効果の検証と要因解析を実施する。また、わが国未発生
22 の作物病虫害に対しては、リスクを適切に評価し、科学的妥当性に基づく防疫技術を開発
23 するとともに、国内新興・再興病虫害のまん延予測と回避技術を開発する。輸出先国の衛
24 生条件や残留農薬基準等に対応するために必要な研究・技術開発を行う。

25
26 さらに、農林水産省、都道府県の家畜保健衛生所等に対し疾病の診断に係わる情報の提
27 供を行うとともに必要な講習会等を実施して、情報の普及、平準化を図る。また、農林水
28 産省、都道府県の病虫害防除所等に対して、病虫害の発生や診断に関わる情報の提供を行
29 う。得られた予防・発生・診断技術等をマニュアル化し、病性鑑定指針を改定するととも
30 に講習等を実施してこれらの普及を促進する。さらに、国際獣疫事務局*（OIE）や国際植
31 物防疫条約*（IPPC）による国際基準の設定等に貢献する。ワクチンや抗ウイルス薬に関し
32 ては、社会実装の具体的な姿を想定して研究開始時に策定する知財戦略に従い、これらの
33 研究成果を民間事業者等に移転することにより速やかな普及を図る。

1 **4. 環境問題の解決・地域資源の活用**

2 **農業の持続化・安定化を図るとともに、地球規模の食料・環境問題に対処する研究開発**

3 **(10) 気候変動に対応した農業分野の影響評価・緩和・適応技術や生物多様性の保全に資**
4 **する技術の開発**

5 気候変動に関する政府間パネル（IPCC）*では、今世紀末の世界の平均気温が最大2.6～
6 4.8℃上昇するほか、異常気象の発生頻度が高まると予測していることから、温暖化の進行
7 に伴う農業等への影響を低減する研究開発が喫緊の課題となっている。

8
9 このため、将来の気候変動が農業に与える影響を、分野・品目ごとにそれぞれ高精度に
10 予測・評価する手法を開発するとともに、予想される気候条件下での安定生産技術の開発
11 を進める。具体的には、より高温耐性の高い農作物新品種・育種素材の評価・利用技術の
12 開発、高温障害に対応した栽培管理技術の開発等に加え、それらの技術を効果的に適用す
13 るための早期警戒システムを確立する【優先度：高】。加えて、農業分野から排出される温
14 室効果ガスの削減等の温暖化緩和技術を開発する。

15
16 また、農業生産活動を通じた生物多様性の保全及び持続可能な利用を推進するため、農
17 業が生物多様性に及ぼす影響を評価するとともに、国際的な科学的評価が求められる生物
18 多様性等と関連した生態系サービス*を解明・評価する。

19
20 さらに、生産者・普及組織等と連携した現地実証試験を各地で実施して、地域条件に即
21 した安定的な農業生産システムを確立し、速やかな普及に向けた体制を整備するとともに、
22 国際的な協調の下で地球規模課題に対応した研究を推進し、積極的に国際貢献を果たす。

23
24
25 **(11) 農村の多面的機能を最大限に発揮させ、生産基盤を持続的に整備・利用・管理する**
26 **技術の開発**

27 農業・農村では、農業就業者と集落人口の減少による農地・農業用水等の基礎的な資源
28 の喪失や、農業生産基盤の老朽化、野生鳥獣による被害の拡大等により、食料の安定供給
29 の確保と多面的機能の発揮に支障が生じる事態が懸念される。将来にわたり農業・農村の
30 持続的な振興を図るため、農業・農村インフラの高度化、長寿命化及び強靱化や、効果的
31 な鳥獣害対策を行う必要がある。東京電力福島第一原発事故による放射性物質汚染地域に
32 おいては、環境中の放射性物質の動態を念頭に置いた除染及び移行抑制対策等の実施によ
33 り、農業経営の早期再開が求められている。

34
35 このため、省力的な水管理や営農等に対応した農地や農業水利システムの保全整備技術
36 の開発、農業水利施設の低コスト長寿命化技術の開発、農村における防災・減災機能を強

1 化するための技術の開発、農村に賦存するエネルギーの有効利用技術の開発を行う。重要
2 な問題となっている鳥獣害に関しては、鳥獣種ごとの特性に応じた被害防止及び捕獲・駆
3 除技術等を開発する。また、環境中における放射性物質の挙動把握等に関する調査研究を
4 継続し、品目・土壌の条件に応じた除染・吸収抑制技術及び営農再開のための技術を開発
5 する。

6
7 さらに、これらの研究成果は、行政機関等との連携により、農業農村整備事業等での活
8 用や、土地改良事業計画設計基準の制定・改定、各種技術資料の策定、現地での技術指導
9 等を通じて、速やかな普及を図る。

12 (12) 持続型農業に資する基盤技術及び地域資源循環技術の開発

13 自然環境に配慮した持続性の高い農業生産を推進するため、農業生産の効率化と環境保
14 全等の効果が両立し得る生産システムの確立が求められている。また、地域の未利用バイ
15 オマス資源等を活用した新たな地域産業を創出することが課題となっている。

16
17 このため、標的外生物への影響を最小化して環境負荷を少なくした薬剤の利用技術、発
18 生予察の高度化に資する基盤技術、物理的・生物的作用や耕種的手法等に基づく新たな作
19 物保護技術を開発し、農業生産の効率化との両立が可能な総合的病虫害・雑草管理* (IPM)
20 を確立する。また、ほ場の地力程度に応じた農業者による適切な土壌管理を可能にする簡
21 易な土壌診断技術を開発する。地域資源循環に関しては、農産廃棄物や家畜排せつ物等か
22 らエネルギーや肥料等を低コスト製造し利用する技術を確立する。

23
24 さらに、これらの研究成果を環境保全型農業推進施策の改定等の行政施策に反映させる
25 ほか、技術の導入便益を農業者や消費者に分かりやすく訴求できる評価指標を開発し、環
26 境保全等に配慮した農業技術の普及を推進する。また、地域資源循環技術については地域
27 の関係機関と連携し、資源循環型で持続性の高い農業システムとして確立し、速やかな普
28 及を図る。

1 【別添2】種苗管理業務の推進

2
3 期間中（平成27年度～平成32年度）に以下の種苗管理業務を行う。

4 5 1. 農林水産植物の品種登録に係る栽培試験等

6 (1) 栽培試験の確実な実施

- 7 ① 品種登録審査を着実に推進するため、栽培試験については前年度出願点数（資料調
8 査によるものを除く）の70%以上を計画的かつ的確に実施する。
- 9 ② 栽培試験対象植物の種類を拡大するために、種類別審査基準案を作成又は改正（中
10 長期目標期間中に60種類程度）する。さらに、植物種類別の栽培・特性調査マニ
11 ュアル及び特殊検定マニュアルを作成又は改正（中長期目標期間中に50種類程度）す
12 る。
- 13 ③ リファレンスコレクション（栽培試験に対照品種や標準品種等として用いる比較品
14 種）については品種ごとの保存の必要性に留意しつつ6,000品種以上を維持する。
15 また、出願品種種子及び種菌の確実な保存を行う。
- 16 ④ 栽培試験結果報告書の提出は、栽培試験終了後、平均80日以内に農林水産省に報告
17 する。
- 18 ⑤ 品種登録審査の国際標準化に資するため、UPOV（植物新品種保護国際同盟）が開催
19 する会議に職員を派遣し、テストガイドライン等の作成に参画する等、審査の国際
20 調和を推進する。

21 22 (2) 育成者権の侵害対策及び活用促進

- 23 ① 育成者権の侵害対策等について、機動的な全国対応を行う。
- 24 ② 我が国の登録品種の海外における育成者権侵害に関する情報を関係行政機関で共有
25 するとともに、特に税関に対し、水際対策に関する情報がある場合には速やかな提
26 供を行う。
- 27 ③ 育成者権者、公的機関その他育成者権の関係者（以下「育成者権者等」という。）か
28 らの侵害及び活用に関する相談に対し、対抗措置及び活用方法等の助言を行うとと
29 もに、6次産業化の促進に向け、品種の保護活用に関するアドバイスを行う。
- 30 ④ 育成者権者等からの依頼に基づく育成者権侵害状況の記録、品種類似性試験等を実
31 施する。導入可能なDNA*品種識別技術については品種類似性試験の対象植物に加え
32 る。また、登録品種等のDNA情報のデータベース化を行う。
- 33 ⑤ ASEAN+日中韓の13カ国により設立された「東アジア植物品種保護フォーラム」を
34 戦略的に展開し、我が国の知的財産である品種が海外で適切に保護されるような環
35 境整備を図る活動を支援する。

1 **2. 農作物（飼料作物を除く。）の種苗の検査、指定種苗の集取、立入検査等**

2 **(1) 国際的な種子流通の活性化に対応した流通段階の種苗の表示や品質の検査等の充実**

- 3 ① 指定種苗の表示検査(15,000点程度/年度)及び集取(3,000点程度/年度)を計画的かつ的確に実施する。
- 4
- 5 ② 「指定種苗の生産等に関する基準」(平成20年7月3日農林水産省告示第1713号)
- 6 に係る純度検査(170点程度/年度)及び病害検査(220点程度/年度)を計画的かつ的確に実施する。
- 7

8

9 **(2) 国際的な種子流通の活性化に対応した依頼検査の実施**

- 10 ① 検査依頼のあった日から、原則として50日以内に検査結果の報告を行う。また、依頼者の意向を把握し、業務の質の向上を図るとともに、検査結果についてクレーム
- 11 があった場合には、適切に処理する。
- 12
- 13 ② 国際的な種子流通の活性化、種苗業者におけるリスク管理の必要性の高まり等に対応するため、依頼検査における検査項目の拡大を図る。
- 14
- 15 ③ 種苗検査等の業務に係る国際機関であるISTA(国際種子検査協会)等が開催する会議に職員を派遣し、国際規格の策定に参画する。
- 16
- 17 ④ 種子の輸出を促進するため、民間の検査機関等が参加する種子検査ネットワークを構築し、種子病害検査法の標準化、普及を促進する。
- 18
- 19 ⑤ OECD品種証明制度に基づくてんさい種子の検査を着実に実施する。

20 **(3) 国からの指示により実施する検査の実施**

- 21 ① 「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」(平成15年法律第97号)第32条第2項の規定に基づく農林水産大臣の指示に従い、立入り、質問、検査及び収去を的確に実施する。
- 22
- 23
- 24 ② EC(現EU)との協議に基づくEU向け輸出野菜種子の検査を着実に実施する。
- 25

26 **3. ばれいしょ及びさとうきびの増殖に必要な種苗の生産、配布等**

- 27 ① 「食料・農業・農村基本計画」に即し、道県の需要量に対応した原原種の供給量を安定的に確保(需要量のほぼ100%を確保できる生産配布計画の作成)する。また、道県の需要に対応した健全無病な種苗の供給を前提に、品質・生産力の向上、省力化及びコストの低減を図り、効率的な原原種の生産を行う。
- 28
- 29
- 30
- 31 ② 新たな病害の発生等に対応し、原原種の無病性(病害罹病率0.1%未満)と品質(ばれいしょ萌芽率90%以上、さとうきび発芽率80%以上)を確保する。
- 32
- 33 ③ ばれいしょ原原種の培養系母本を基にした急速増殖技術を活用した生産体系において、培養変異のチェックを強化し品種の純粋性の維持を図る。
- 34
- 35 ④ ミニチューバー等を用いた原原種生産体系の拡大により新品种等の原原種の供給期間の短縮を図る。
- 36

- 1 ⑤ 原原種の配布先の意向等を把握するためのアンケート調査を実施する。
2 ⑥ ばれいしょ及びさとうきびに係る試験研究を行う試験研究機関等に対し、技術の提
3 供及び健全無病種苗の配布を行い、新品種の開発・普及を支援する。

4
5 **4. 種苗管理業務に係る研究開発成果の現場への橋渡し等**

6 **(1) 研究成果の生産現場への橋渡し**

- 7 ① 果樹新品種の早期普及のため、母樹の増殖を支援する。
8 ② 研究開発部門からの要請に応じて、畑作物の試験研究用種苗等を増殖する。

9
10 **(2) 情報提供**

- 11 ① 品種登録出願者に対する情報提供や、種苗業者及びばれいしょ、さとうきび種苗生
12 産者に対する技術指導等を行う。
13 ② 種苗管理業務を通じて得られた情報及び知見を農林水産省に提供する。

14
15 **(3) 種苗管理担当者の業務運営能力の向上**

16 種苗管理業務に係る先進的な技術・知識等の導入に努めるとともに、種苗管理担当者の
17 業務運営能力の向上を図る。

1 用語解説

頁	用語	意味
P. 20	【重要度：高】	水田は我が国の農業生産基盤の中心であり、収益性の高い水田輪作体系の確立は、食料の安定供給や自給率の向上を図る上で極めて重要であるため。
P. 23	【難易度：高】	現在のコメの平年収量が 10a 当り 517kg (平成 27 年産) であることに鑑み、目標とする単収 1.5t の稲育種素材の開発は、世界最高水準を目指す極めてチャレンジングなものであるため。
P. 28	【優先度：高】	環境省中央環境審議会が平成 27 年 3 月に出した報告書「日本における気候変動による影響に関する評価報告書」によると、気候変動による農作物（特にコメ）への影響は、重大かつ緊急性が高いと評価しているため。
P. 6	『知』の集積と活用の中	農林水産・食品分野に異分野の知識や技術を導入し、革新的な技術シーズを生み出すとともに、それらの技術シーズをスピード感を持って事業化・商品化に導き、国産農林水産物のバリューチェーンの構築に結びつける新たな産学連携研究の仕組み
P. 6	PDCA サイクル	Plan(計画)、Do(実行)、Check(評価)、Action(改善)の4段階を繰り返すことで、業務を継続的に改善する手法。
P. 6	バックキャストアプローチ	現在又は将来の政策課題から今後推進すべき研究開発の内容を導き出す手順。
P. 7	異分野融合研究	近年めざましい進展をみせている医療、IT、ロボット工学等の異分野と農林水産・食品分野の技術を連携することで、新たな技術革新を図るオープン・イノベーション研究。
P. 7	農業のスマート化	ロボット技術や ICT を活用して、農業分野で超省力・高品質生産を実現すること。
P. 7	ビッグデータ	従来のデータベース管理システムなどでは記録や保管、解析が難しいような巨大なデータ群。これらのデータ群を解析することで、ビジネスや社会に有用な知見を得たり、これまでにないような

		新たな仕組みやシステムを産み出す可能性が高まるとされている。
P. 8	資金提供型共同研究	民間企業等から研究資金を受けて実施する共同研究。
P. 8	内部研究組織	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構を構成する研究組織(センター、研究部門等)を指す。
P. 8	地域農業研究	地域の生産現場等が直面する問題を速やかに解決するための研究開発。
P. 8	ハブ機能	地域の公設試や大学、普及組織、民間企業等、研究プロジェクト推進に必要な関係機関との連絡調整機能。
P. 8	フィードバック研究	現地実証試験等を実施し、その過程で顕在化した問題を解決するため、必要があれば基礎研究にまで戻り、技術の適用度・完成度を高める研究。
p. 8	グローバル・フードバリューチェーン戦略	産学官連携で生産から製造・加工、流通、消費に至るフードバリューチェーンの構築を推進し、日本の食産業の海外展開と成長、食のインフラ輸出と日本食の輸出環境の整備、経済協力との連携による途上国の経済成長を実現していく戦略。
P. 10	双方向コミュニケーション	研究成果等を一般の方々に分かりやすく説明するとともに、一般の方々の期待や不安、懸念等の声を真摯に受け止め、その後の研究開発や実用化のプロセスに活かしていくための双方向のコミュニケーション。
P. 10	レギュラトリーサイエンス	科学・技術を人間生活ないし社会に望ましい姿で適用するための調整(ルールづくり)の役割、ひいては、安全行政を支援する役割をもつ科学のこと。
P. 11	目的基礎研究	研究者の独創的アイデアや純粋基礎研究の成果を基に、農林水産業・食品産業分野における技術革新や新事業の創出など、将来のイノベーションにつながる技術シーズを開発するための基礎研究。
P. 12	農林水産植物	農産物、林産物及び水産物の生産のために栽培される種子植物、しだ類、せんたい類、多細胞の藻

		類その他種苗法施行令（平成 10 年 11 月 20 日、最終改正平成 27 年 3 月 18 日）で定める植物。（種苗法第 2 条に基づく）
P. 14	OECD トラクターテストコード	OECD 加盟国を中心として、農用トラクター及び安全キャブ・フレームの国際流通を促進することを目的とした標準試験ルール（規約）であり、トラクターの性能、安全性に関するテスト方法の世界的な標準となっているもの。
P. 15	生物系特定産業技術	農林漁業、飲食品製造業やたばこ製造業など、生物又は生物の機能性の成果に依存する産業で用いられる技術。
P. 17	セグメント	法人の内部管理の観点や財務会計との整合性を確保した上で、少なくとも、目標及び評価において一貫した管理責任を徹底し得る単位。
P. 18	キャリアパス	ある職位に就くまでに経験すべき業務や身につけるべき能力の順序や計画。
P. 19	クロスアポイントメント制度	研究者等が、大学や公的研究機関、民間企業等の間で、それぞれと雇用契約関係を結び、各機関の責任の下で業務を行うことが可能となる仕組み。
P. 20	コントラクター	農作業の請負等を行う組織
P. 23	マーケットイン型育種	実需者等のニーズに的確に応える農作物品種の育成。
P. 24	ゲノム編集	人工ヌクレアーゼとよばれる DNA 切断酵素を用いてゲノム DNA を配列特異的に切断し、その切断部位が修復される過程で偶発的に生じる変異を利用した遺伝子改変技術。
P. 24	オミクス解析技術	生物の細胞中における遺伝子発現、タンパク質、代謝物などの変動を従来のように個別に調べるのではなく網羅的に解析することで生命現象を包括的に理解する研究手法。
P. 26	コーデックス委員会	消費者の健康の保護、食品の公正な貿易の確保等を目的として、1963 年に設置された国際的な政府間機関であり、国際食品規格の策定等を行っている。
P. 26	HACCP	事業者が原料受入れから最終製品までの各工程

		で、微生物等による汚染、金属の混入等の危害を予測（危害要因を分析）し、危害の防止につながる特に重要な工程（重要管理点）を継続的に監視・記録するシステム。
P. 27	国際獣疫事務局（OIE）	国際獣疫事務局は、1924年に28カ国の署名を得てフランスのパリで発足した世界の動物衛生の向上を目的とする政府間機関。動物衛生や人獣共通感染症に関する国際基準の作成等を行っている。
P. 27	国際植物防疫条約（IPPC）	植物に有害な病害虫が侵入・まん延することを防止するために、加盟国が講じる植物検疫措置の調和を図ることを目的としている。植物検疫措置に関する国際基準（ISPM）の策定、技術協力の実施、病害虫に関する情報交換等を行っている。
P. 28	気候変動に関する政府間パネル（IPCC）	人為起源による気候変動・影響・適応・緩和方策に関し、科学的、技術的、社会経済学的な見地から包括的な評価を行うことを目的として、1988年に世界気象機関（WMO）と国連環境計画（UNEP）により設立された組織。
P. 28	生態系サービス	人々が生態系から得ることのできる便益のことで、食料、水、木材、繊維、燃料などの「供給サービス」、気候の安定や水質の浄化などの「調整サービス」、レクリエーションや精神的な恩恵を与える「文化的サービス」、栄養塩の循環や土壌形成、光合成などの「基盤サービス」などがある。
P. 29	総合的病害虫・雑草管理（IPM）	利用可能なすべての防除技術を経済性を考慮しつつ慎重に検討し、病害虫・雑草の発生増加を抑えるための適切な手段を総合的に講じるものであり、これを通じ、人の健康に対するリスクと環境への負荷を軽減、あるいは最小の水準にとどめるものである。

1 JIRCAS 第4期 中長期目標 20151119 案

2
3 構成4
5 第1 政策体系における法人の位置づけ及び役割

- 6 (1) 農政の動向と国際協力の新展開
- 7 (2) 「農林水産研究基本計画」の考え方と JIRCAS の役割
- 8 (3) 独立行政法人改革の動き
- 9 (4) 本中長期目標期間における重点事項

10 第2 中長期目標の期間

11 第3 研究開発の成果の最大化その他の業務の質の向上に関する事項

12 3-1. 政策の方向に即した研究の推進と PCDA サイクルの強化

- 13 (1) 政策の方向に即した研究の戦略的推進
- 14 (2) 法人一体の評価と資源配分

15 3-2. 産学官連携、協力の促進・強化

16 3-3. 知的財産マネジメントの戦略的推進

- 17 (1) 知的財産マネジメントに関する基本方針の策定
- 18 (2) 知的財産マネジメントによる研究開発成果の社会実装の促進

19 3-4. 研究開発成果の社会実装の強化

- 20 (1) 研究開発成果の公表
- 21 (2) 技術の普及に向けた活動の推進
- 22 (3) 広報活動の推進
- 23 (4) 国民との双方向コミュニケーション
- 24 (5) 研究開発成果の中長期的な波及効果の把握と公表

25 3-5. 行政部局等との連携強化

26 3-6. 研究業務の推進（試験及び研究並びに調査）

- 27 (1) 研究の重点化及び推進方向
- 28 (2) 国際的な農林水産業に関する動向把握のための情報の収集、分析及び提供

29 第4 業務運営の効率化に関する事項

30 4-1. 経費の削減

- 31 (1) 一般管理費等の削減
- 32 (2) 調達合理化

33 4-2. 組織・業務の見直し・効率化

- 34 (1) 組織・業務の再編
- 35 (2) 研究施設・設備の集約（施設及び設備に関する計画）

- 1 **第5 財務内容の改善に関する事項**
- 2 (1) 収支の均衡
- 3 (2) 業務の効率化を反映した予算の策定と遵守
- 4 (3) 自己収入の確保
- 5 (4) 保有資産の処分
- 6 **第6 その他業務運営に関する重要事項**
- 7 **6-1. 法人のガバナンス強化**
- 8 (1) 内部統制システムの構築
- 9 (2) コンプライアンスの推進
- 10 (3) 情報公開・情報セキュリティの推進
- 11 (4) 環境対策・安全管理の推進
- 12 **6-2. 研究を支える人材の確保・育成**
- 13 (1) 人材育成プログラムの実施
- 14 (2) 人事に関する計画
- 15 (3) 人事評価システムの運用
- 16 (4) 職員の給与体系等の見直し
- 17 **6-3. 主務省令で定める業務運営に関する事項**
- 18
- 19 **【別添】 研究開発の重点化方向と成果の社会実装**
- 20

1 第1 政策体系における法人の位置づけ及び役割

2 (1) 農政の動向と国際協力の新展開

3 平成25年12月に「農林水産業・地域の活力創造プラン」(平成25年12月10日農林水
4 産業・地域の活力創造本部決定、平成26年6月24日改訂)が決定された。これは、①国
5 内外の需要の拡大、②需要と供給をつなぐ付加価値向上のためのバリューチェーンの構築、
6 ③農地の集約化など生産コスト削減等を通じた生産現場の強化、④農村の多面的機能の維
7 持・発揮の4つの柱を軸に政策を再構築したもので、いわゆる「攻めの農林水産業」の方
8 針である。

9 こうした施策の方向にこれまでの施策の評価を加え、新たな「食料・農業・農村基本計
10 画(平成27年3月31日)」が閣議決定された。この中で、開発途上地域に対しては、飢餓・
11 貧困対策や、気候変動、越境性感染症等の地球規模課題に対応するため、農業生産や食品
12 安全等に関する技術協力を実施することとされている。また、新たな開発途上地域支援の
13 仕組みとして、世界の食料安全保障と開発途上地域の経済成長等に貢献するため、官民連
14 携によるフードバリューチェーンの構築を推進することとされている。

15 (2) 農林水産研究基本計画の考え方と JIRCAS の役割

16 「食料・農業・農村基本計画」に併せ、その実現を技術開発面から支える新たな「農林
17 水産研究基本計画」(平成27年3月31日農林水産技術会議決定)が決定された。同計画は、
18 世界的な人口の増加、新興国における経済成長や所得水準の向上、気候変動などによって、
19 中長期的に世界の食料需給のひっ迫が懸念されていることを指摘している。また、政府の
20 方針等との整合を図りながら、農林水産業の潜在能力が十分に発揮できていない開発途上
21 地域を対象として、地域の自然環境にも配慮しつつ、持続性の高い農林水産業を構築し、
22 世界の食料増産を推進することが必要であるとしている。このような中で、国立研究開発
23 法人国際農林水産業研究センター(以下「JIRCAS」という。)は、同計画の示す開発
24 途上地域に対する研究開発に関して中核的な役割を担うことが期待されている。

25 (3) 独立行政法人改革の動き

26 JIRCASは、開発途上地域における農林水産業に関する研究開発を担う機関として、
27 環境ストレス耐性遺伝子の発見や未利用バイオマス活用技術の開発等の成果をあげ、開発
28 途上地域の農林水産業の発展に貢献するとともに、国際的な農林水産業研究における我が
29 国の研究拠点としての役割を果たしてきた。

30 政府の独立行政法人改革の検討が進む中、平成25年12月に「独立行政法人改革等に関
31 する基本的な方針(平成25年12月24日)」が閣議決定された。その中でJIRCASに
32 ついては、国際的な農林水産業分野での研究を実施する組織として認知されている高いプ
33 レゼンス等を生かすため、引き続き単独で存置されるとともに国立研究開発法人として研
34 究開発成果の最大化を目指すこととされた。これを受け、開発途上地域の農林水産業の技
35 術
36

1 術向上を目指し、JIRCAS は効果的・効率的な組織運営の下、研究開発成果の利活用を見据
2 えた研究開発を関係機関と連携して推進し、優れた成果を創出するとともに、それらを広
3 く社会実装する。さらに、普及・活用状況を研究開発にフィードバックし、成果の実用性・
4 完成度を高めることで、研究資源の投入に対して最大限の成果を得ることにより開発途上
5 地域と我が国の公益に資するものとする。一方で、第3期中期目標期間内に不適正な経理
6 処理事案等が発生した事態を重く受け止め、内部統制の強化や職員のコンプライアンス意
7 識の向上に全力で取り組むことが必要である。

9 (4) 本中長期目標期間における重点事項

10 JIRCAS は、「農林水産研究基本計画」が示す開発途上国における研究開発の中核的な研究
11 機関として、技術的課題に対応する必要がある。また、独立行政法人改革の精神を踏まえ、
12 研究開発成果の最大化を目指す必要がある。このため、平成28年度から始まる中長期目標
13 期間においては次の点を特に重視し業務を行うこととする。

15 ①研究開発成果の最大化に向けた研究マネジメント改革

16 中長期計画やその達成のための研究課題は、地球規模の食料・環境問題に対処し、
17 国際貢献を図るとともに、開発途上地域の農林水産業の技術の向上による当該地域
18 の食料問題の解決を通して我が国の食料安全保障に寄与する観点から設定する。

19 また、JIRCAS が行う研究開発により、我が国の企業、生産者等が活用できる技術
20 シーズや知見が得られた場合には、事業化等に貢献するための情報提供や現地での
21 支援等を積極的に行う。

22 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（以下「農研機構」という。）
23 等との強い連携体制を構築し、効果的・効率的に業務を推進する。

25 ②政府方針に即した開発途上地域における研究開発

26 アフリカ開発支援などに向けた政府の方針や農林水産省が主導するグローバル・
27 フードバリューチェーン戦略*等に即して、海外機関や国際機関等と連携し、開発途
28 上地域における持続的な資源・環境管理技術の開発、熱帯等の不良環境における農
29 作物等の安定生産技術の開発、地域資源等の活用と高付加価値化技術の開発を重点
30 的に実施する。

32 ③法人としてのガバナンス強化

33 理事長のリーダーシップの下、迅速・的確な意思決定を行う。また、海外での研
34 究活動に起因するものを含めたリスク管理、コンプライアンス推進体制の強化等
35 を行う。

1 第2 中長期目標の期間

2
3 中長期目標の期間は、平成28年4月1日から平成33年3月31日までの5年間とする。

5 第3 研究開発の成果の最大化その他の業務の質の向上に関する事項

6 3-1. 政策の方向に即した研究の推進とPCDAサイクル*の強化

7 (1) 政策の方向に即した研究の戦略的推進

8 中長期計画やその達成のための研究課題は、地球規模の食料・環境問題に対処し、国際
9 貢献を図るとともに、開発途上地域の農林水産業の技術の向上による当該地域の食料問題
10 の解決を通して我が国の食料安全保障に寄与する観点から設定する。また、研究課題の進
11 捗管理のため、研究工程表を作成し、その活用を図る。さらに、研究課題の評価は外部有
12 識者等を活用し、国際的な見地に基づいて自ら厳格に実施するとともに、評価結果に基づ
13 く「選択と集中」を徹底し、研究の進捗状況、社会情勢の変化等に応じ機動的に研究課題
14 の見直しを行うとともに、社会実装の可能性が低下した研究課題は変更や中止を行う。

15 (2) 法人一体の評価と資源配分

16 限られた予算、人員等を法人全体で有効に活用し最大限の成果を得ることが重要である。
17 このため、法人全体を俯瞰して厳格な評価を行い、予算・人員等の資源を的確に配分する
18 システムを構築するなどPCDAサイクルを強化し運用する。

19 また、運営費交付金を効果的に活用するとともに、中長期目標に即した研究開発の一層
20 の推進を図るため、外部資金の獲得に積極的に取り組み、研究資金の効率的活用に努める。

21 主務大臣による評価結果等については確実に業務運営に反映させる。

22 23 24 25 3-2. 産学官連携、協力の促進・強化

26 アフリカ開発支援などに向けた政府の方針、農林水産省が主導するグローバル・フード
27 バリューチェーン戦略等に即して、開発途上地域における農林水産業に関する研究水準を
28 向上させ、優れた研究開発成果や知的財産を創出するため、他の海外機関や国際機関、農
29 業関係国立研究開発法人、大学、民間等との連携・協力及び研究者の交流を積極的に行う。

30 特に、農研機構、国立研究開発法人森林総合研究所、国立研究開発法人水産総合研究セ
31 ンター等との協力関係を強化し、効果的・効率的に業務を推進する。

32 また、農研機構がセンターバンクとして実施する農業生物資源ジーンバンク事業につい
33 て、センターバンクとの密接な連携の下、サブバンクとして遺伝資源の保存、特性評価等
34 を効率的に実施するとともに、農研機構が推進するイネ等の育種の効率化に協力する。

3-3. 知的財産マネジメントの戦略的推進

(1) 知的財産マネジメントに関する基本方針の策定

「農林水産研究知的財産戦略」(平成〇〇年〇月〇日農林水産技術会議決定)等を踏まえ、JIRCASの知的財産に関する基本方針を見直す。

(2) 知的財産マネジメントによる研究開発成果の社会実装の促進

研究開発成果を開発途上地域の農林水産業の現場等での活用に結びつけ、その効果を迅速に社会実装していくため、商品化・事業化に有効な知的財産の取扱方針を描いた上で、研究開発の企画・立案段階から終了後の一連の過程において、以下のとおり、戦略的な知的財産マネジメントに取り組む。なお、その際には、地球公共財(Global Public Goods)*への貢献も考慮する。

- ① 発明時における権利化・秘匿化・公知化・標準化や、権利化後の特許等の開放あるいは独占的な実施許諾等の多様な選択肢を視野に入れ、事業の成功を通じた社会実装を加速化する観点から最も適切な方法を採用する。
- ② 知的財産の組み合わせによる成果技術の保護強化*、知的財産の群管理*等の取組を推進する。

3-4 研究開発成果の社会実装の強化

(1) 研究開発成果の公表

研究開発成果については、研究成果情報、学術雑誌等への論文掲載等により積極的に公表する。その際には、権利化の可能性、秘匿化の必要性等を十分検討する。

(2) 技術の普及に向けた活動の推進

前中期目標期間までに得られた研究開発成果を含め、JIRCAS及び研究者自らが、成果の利活用が見込まれる国や地域において、関係機関等と連携し、技術の普及に向けた活動を行う。

また、JIRCASが行う研究開発により、我が国の企業、生産者等が活用できる技術シーズや知見が得られた場合には、事業化等に貢献するための情報提供や現地での支援等を積極的に行う。

(3) 広報活動の推進

信頼できる農業研究機関として国内外で広く認知されるよう、広報活動のあり方を的確に見直す。得られた研究開発成果や研究情報は、その活用が見込まれる国・地域等で、各

1 種的手段を活用して的確に発信する。

2
3 (4) 国民との双方向コミュニケーション*

4 JIRCAS 及び研究者自らが、シンポジウムやイベント、学校教育に参加すること等により、
5 我が国や関係国の国民との継続的な双方向コミュニケーションを進める。これにより、研
6 究開発のニーズ、研究開発に対する期待や不安、懸念等の声を把握するとともに、農林水
7 産分野における国際的な研究開発や JIRCAS の研究開発成果等への理解を促進する。

8
9 (5) 研究開発成果の中長期的な波及効果の把握と公表

10 JIRCAS の成果が開発途上地域等で活用され、関係国や我が国に大きな波及効果を及ぼす
11 には通常長い年月を要する。このため、過去の研究開発成果の社会への貢献についてでき
12 るだけ定量的に実績を把握し、その結果を関係国及び我が国の国民に公表するとともに、
13 社会に貢献する研究開発成果の創出を常に強く意識して業務を進める。

14
15 **3-5. 行政部局等との連携強化**

16 農林水産省の行政部局と研究計画段階から密接に連携し、行政部局のニーズを十分に理
17 解して業務を進める。また、緊急時対応を含め連携会議、専門家派遣、シンポジウム開催
18 等に対応する。

19 専門研究分野を活かし、JIRCAS の高い専門知識が必要とされる分析及び鑑定、講習や研
20 修の開催、国際機関や学会への協力等を行う。

21
22 **3-6. 研究業務の推進（試験及び研究並びに調査）**

23 (1) 研究の重点化及び推進方向

24 「農林水産研究基本計画」に即し、開発途上地域における持続的な資源・環境管理技術
25 の開発、熱帯等の不良環境における農作物の安定生産技術の開発及び開発途上地域の地域
26 資源等の活用と高付加価値化技術の開発を重点的に実施し、世界の食料安全保障の確保や
27 気候変動問題等、地球規模の課題への対応等に貢献する。

28 研究の推進に当たっては、研究開発成果の政府開発援助（ODA*）等での活用も念頭に置
29 き、開発途上地域における農林水産業に関する研究を包括的に行い得る我が国唯一の研究
30 機関として、開発途上地域、先進諸国、国際研究機関、NGO* 等民間団体と連携し、国際共
31 同研究等に取り組む。

32 また、農研機構など他の農林水産関係国立研究開発法人との連携を一層強化し、各法人
33 の有する研究資源を活用した共同研究等を効率的に推進する。

34 これらのことを実現するため、「別添」に示した研究を進める。

35 加えて、こうした基本的な方向に即して将来の技術シーズの創出を目指すために重要な
36 基礎・基盤的な研究開発（目的基礎研究*）を併せて着実に推進する。

1 なお、農研機構がセンターバンクとして実施する農業生物資源ジーンバンク事業につい
2 て、センターバンクとの緊密な連携の下、サブバンクとして遺伝資源の保存、特性評価等
3 を効率的に実施するとともに、農研機構が推進する稲等の育種の効率化に協力する。

5 (2) 国際的な農林水産業に関する動向把握のための情報の収集、分析及び提供

6 国際的な食料・環境問題の解決を図るため、諸外国における農林水産業の生産構造及び
7 食料需給・栄養改善等に関する現状分析、将来予測及び研究開発成果の波及効果分析を行
8 う。

9 また、開発途上地域での農林水産業関連の研究や我が国が進めるグローバル・フードバ
10 リューチェーン構築等の施策に資するため、国際的な食料事情、農林水産業及び農山漁村
11 に関する資料を、継続的・組織的・体系的に収集・整理し、広く研究者、行政組織、企業
12 等に提供する。

14 **第4 業務運営の効率化に関する事項**

15 **4-1. 経費の削減**

16 (1) 一般管理費等の削減

17 運営費交付金を充当して行う事業について、業務の見直し及び効率化を進め、一般管理
18 費（人件費を除く。）については毎年度平均で少なくとも対前年度比3%の抑制、業務経費
19 については毎年度平均で少なくとも対前年度比1%の抑制を行うことを目標とする。

21 (2) 調達合理化

22 「独立行政法人における調達等合理化の取組の推進について」（平成27年5月25日総務
23 大臣決定）等を踏まえ、公正かつ透明な調達手段による、適正で迅速かつ効果的な調達を
24 実現する観点から、毎年度策定する「調達等合理化計画」の中で、定量的な目標や具体的
25 な指標を設定し、取組を着実に実施する。

26 特に、短期間で納入が必要な研究開発用物品について、調達に要する時間の大幅な短
27 縮が可能となるよう、公正性を確認しつつ、迅速な調達方法の検討・導入を進める。

28 また、農研機構など他の独立行政法人との共同調達などの連携に積極的に取り組み、一
29 層の効率化を図る。

32 **4-2. 組織・業務の見直し・効率化**

33 (1) 組織・業務の再編

34 中長期目標の達成に向けて人材、研究資金等の研究資源を有効に活用できるよう、組織
35 体制の整備や業務の見直しを行う。

36 法人内の情報システムの整備など業務の電子化を進め、業務内容の効率化を図る。

1 上記の取組により、全体としての適切な人員配置と業務の最適化を図る。

2
3 (2) 研究施設・設備の集約（施設及び設備に関する計画）

4 研究施設・設備については、研究の重点化方向や老朽化の状況等を踏まえ、真に必要な
5 ものを計画的に整備するとともに、有効活用に努める。

6
7 **第5 財務内容の改善に関する事項**

8 (1) 収支の均衡

9 適切で効率的な業務運営を行うことにより、収支の均衡を図る。

10
11 (2) 業務の効率化を反映した予算の策定と遵守

12 「第4 業務運営の効率化に関する事項」及び(1)に定める事項を踏まえた中長期計画
13 の予算を作成し、当該予算による運営を行う。

14 独立行政法人会計基準の改訂（平成12年2月16日独立行政法人会計基準研究会策定、
15 平成27年1月27日改訂）等により、運営費交付金の会計処理として、業務達成基準による
16 収益化が原則とされたことを踏まえ、収益化単位の業務ごとに予算と実績を管理する体
17 制を構築する。

18 一定の事業等のまとまりごと適切にセグメント*を設定し、セグメント情報の開示に努め
19 る。

20
21 (3) 自己収入の確保

22 受託研究等の外部研究資金の獲得、受益者負担の適正化、特許実施料の拡大等により自
23 己収入の確保に努める。特に、「独立行政法人改革等に関する基本的な方針」において、「法
24 人の増収意欲を増加させるため、自己収入の増加が見込まれる場合には、運営費交付金の
25 要求時に、自己収入の増加見込み額を充てて行う新規業務の経費を見込んで要求できるも
26 のとし、これにより、当該経費に充てる額を運営費交付金の要求額の算定に当たり減額し
27 ないこととする。」とされていることを踏まえて適切な対応を行う。

28
29 (4) 保有資産の処分

30 現有の施設・設備について自主点検を行い、そのうち不要と判断されたもの及び利用率
31 の低いものについては積極的に処分する。

32
33 **第6 その他業務運営に関する重要事項**

34 **6-1. 法人のガバナンス強化**

35 (1) 内部統制システムの構築

36 JIRCASの役割を効果的・効率的に果たすため、内部統制の仕組みを高度化し運用する。

1 その際、理事長のリーダーシップと十分な情報共有の下、各役員の担当業務、権限及び
2 責任を明確にし、迅速かつ的確な意思決定を行う。また、各業務について、役員から現場
3 職員までの指揮命令系統を明確化する。

4 第3期中期目標期間内に生じた不適正な経理事務等の事態を重く受け止め、物品の
5 適正な調達、海外での研究活動に起因する事象を含めたその他のリスク管理等の対策を徹
6 底し、不適正事案の根絶に向け、内部統制の仕組みを強化する。

7 8 (2) コンプライアンスの推進

9 JIRCAS に対する国民の信頼を確保する観点から法令遵守を徹底し、法令遵守や倫理保持
10 に対する役職員の意識向上を図る。

11 研究活動における不適正行為については、政府が示したガイドライン等を踏まえ対策を
12 推進する。

13 14 (3) 情報公開・情報セキュリティの推進

15 法人運営の透明性を確保するため、情報公開を積極的に進める。

16 政府機関の情報セキュリティ対策のための統一的な基準等を踏まえ、個人情報保護や秘
17 匿化した技術情報の管理などを含め、情報セキュリティを確保する。

18 19 (4) 環境対策・安全管理の推進

20 化学物質、生物材料等の適正管理などにより研究活動に伴う環境への影響に十分な配慮
21 を行うとともに、エネルギーの有効利用やリサイクルの促進に積極的に取り組む。

22 安全衛生面に関わる事故等を未然に防止するための管理体制を構築するとともに、災害
23 等による緊急時の対策を整備する。

24 25 26 **6-2. 研究を支える人材の確保・育成**

27 (1) 人材育成プログラムの実施

28 優れた研究者を確保・育成するとともに、研究の企画や評価、研究業務の支援や技術移
29 転、組織運営など様々な分野の人材を育成するため、JIRCAS の人材育成プログラムに基づ
30 く取組を実施する。

31 その際、優れた研究管理者を養成する観点を重視する。また、計画的な養成が期待され
32 る、研究業務の支援、技術移転活動等を行う人材を育成するためのキャリアパス*を構築す
33 る。

34 また、行政部局等との多様な形での人的交流の促進、研究支援の高度化を図る研修等に
35 より、職員の資質向上を図る。

1 (2) 人事に関する計画

2 本中長期目標期間中の人事に関する計画を定め、業務に支障を来すことなく、その実現
3 を図る。

4 その際、職種にとらわれず適材適所の人員配置を行うとともに、任期制やクロスアポイ
5 ントメント制度*等の多様な雇用形態や公募方式の活用を図る。また、優秀な女性・若手職
6 員を積極的に採用するとともに、女性の幹部登用、ワークライフバランス推進等の男女共
7 同参画の取組を強化する。

8
9 (3) 人事評価システムの運用

10 公正かつ透明性の高い職員の業績及び能力評価システムを運用する。その際、研究職員
11 の評価は、研究開発成果の行政施策・措置の検討・判断への貢献、研究開発成果が社会に
12 及ぼす影響、技術移転活動への貢献等を十分勘案したものとする。

13 人事評価結果については、組織の活性化と実績の向上を図る観点から、適切に処遇等に
14 反映する。

15
16 (4) 職員の給与体系等の見直し

17 職員の給与については、職務の特性や国家公務員・民間企業の給与等を勘案した支給水
18 準とする。

19 また、クロスアポイントメント制度や年俸制など研究業務の特性に応じたより柔軟な報
20 酬・給与制度の導入に取り組むとともに、透明性の向上や説明責任の一層の確保のため、
21 給与水準を公表する。

22
23 **6-3. 主務省令で定める業務運営に関する事項**

24 国立研究開発法人国際農林水産業研究センターの業務運営及び人事管理に関する省令
25 (平成15年9月16日)に基づき、中長期計画に積立金の処分に関する事項を定める。

26 なお、施設及び設備に関する計画については第4の2の(2)、職員の人事に関する計画
27 については第6の2の(2)に定める。

1 **【別添】研究開発の重点化方向と成果の社会実装**

平成 32 年度末までに以下の研究開発等を行う。

1. **開発途上地域における持続的な資源・環境管理技術の開発**

気候変動や環境劣化等の地球規模課題に対処するには、経済活動で農業分野が大きな割合を占める開発途上地域における対策が不可欠である。

このため、地球温暖化の要因である農業分野からの温室効果ガスの排出を抑制するとともに、気候変動に対する強靱性や復元力を高めるための技術を開発する。【重要度：高】*
また、アジアおよびアフリカ地域を中心とする開発途上地域の環境劣化を抑制し、農業生産の安定化を図るため、水や土壌等、資源の保全管理技術等を開発する。

さらに、現地の研究機関等と共同で技術開発や実証試験を行うとともに、技術マニュアル等を作成し、開発途上地域の環境条件に即した持続的な農業資源管理技術を開発し、行政部局や農民へ速やかな普及を図る。

2. **熱帯等の不良環境における農産物の安定生産技術の開発**

世界人口の増加や新興国における経済成長及び所得水準の向上により、中長期的には世界の食料需給がひっ迫することが懸念されている。低肥沃度や乾燥等の不良環境のため農業生産の潜在能力が十分に発揮できていない熱帯等の開発途上地域を対象として、アフリカをはじめとする世界の栄養改善に向けて、食料増産を推進することが重要である。

このため、アフリカの食料問題解決のため市場での流通や消費拡大を目指したイネ、畑作物の安定生産技術の開発【重要度：高】*、低肥沃度や乾燥等の不良環境に適応可能な作物開発と利用技術の開発、我が国への侵入・拡大が懸念される越境性の作物病害虫に関するネットワーク研究等による防除技術の開発等を行う。

さらに、現地の研究機関等と共同で技術開発や実証試験を行うとともに、マニュアルや解説資料等を作成し、品種開発関係者や行政部局、農民に対して開発技術の速やかな普及を図る。

3. **開発途上地域の地域資源等の活用と高付加価値化技術の開発**

開発途上地域の開発ニーズは、単なる貧困撲滅から経済成長に変化しており、農林水産分野においても、地域における多様な資源を活用した高付加価値化技術の開発が求められている。特に食料資源に関しては、生産から加工、流通、販売に至る付加価値の高いフードバリューチェーンの構築への貢献が求められている。

このため、アジア等の開発途上地域における農山漁村開発を支援し、農民の所得向上に貢献するため、農林漁村における多様な資源や未利用バイオマス等の地域資源の活用を図ると共に、フードバリューチェーン構築を推進し、資源の高付加価値化技術を開発する【重

1 要度：高】*。また、農産廃棄物等のバイオマスの高度利用技術の開発・実用化を推進する
2 と共に、農村における多様な資源の活用、森林資源の育成・保全と高付加価値化、水産資源
3 の持続的利用と効率的な養殖等、生態系と調和した資源の活用を図る。

4 さらに、これらの研究課題を我が国及び現地の民間企業や研究機関等と連携して推進し、
5 実用レベルでの技術として体系化するとともに、技術マニュアルの作成や技術展示を行い、
6 農民や地域の加工流通関係者等への速やかな普及を図る。

7

8

1 用語解説

頁	用語	意味
P. 12	【重要度：高】	IPCC*の第5次評価報告書において、将来、気候変動に対する適応が限界を超える可能性があり、効果的な適応策に緩和策を合わせた対策が強靱な社会や持続可能な開発を促進させることが示されており、経済活動で農業分野が大きな割合を占める開発途上地域での対策が極めて重要であるため。
P. 12	【重要度：高】	SDGs*の目標において、「飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進すること」が示されており、栄養不足人口が多く農業生産性が低いアフリカでの食料問題の解決に向けた取り組みが極めて重要であるため。
P. 12	【重要度：高】	グローバル・フードバリューチェーン戦略（平成26年6月）において、農林水産分野においても付加価値の高いフードバリューチェーンの構築が求められていることが示されており、その取り組みを通じて農民の所得向上に貢献することが極めて重要であるため。
P. 4	グローバル・フードバリューチェーン戦略	産学官連携で生産から製造・加工、流通、消費に至るフードバリューチェーンの構築を推進し、日本の食産業の海外展開と成長、食のインフラ輸出と日本食の輸出環境の整備、経済協力との連携による途上国の経済成長を実現していく戦略
P. 5	PDCA サイクル	Plan(計画)、Do(実行)、Check(評価)、Action(改善)の4段階を繰り返すことで、業務を継続的に改善する手法。
P. 6	地球公共財 (Global Public Goods)	国・地域を越えて世界的に裨益する成果。
P. 7	双方向コミュニケーション	研究成果等を一般の方々に分かりやすく説明するとともに、一般の方々の期待や不安、懸念等の声を真摯に受け止め、その後の研究開発や実用化のプロセスに活かしていくための双方向のコミュニケーション。
P. 7	ODA (Official Development	平和構築やガバナンス、基本的人権の推進、人道支援等を含む開発途上国の「開発」のために、政

	Assistance : 政府開発援助)	府または政府の実施機関によって、開発途上国または国際機関に対し、公的資金を用いて資金・技術提供を行うもの。
P. 7	NGO (Non-Governmental Organization : 非政府組織)	開発、貧困、平和、人道、環境等の地球規模の問題に自発的に取り組む非政府・非営利組織
P. 7	目的基礎研究	研究者の独創的アイデアや純粋基礎研究の成果を基に、農林水産業・食品産業分野における技術革新や新事業の創出など、将来のイノベーションにつながる技術シーズを開発するための基礎研究。
P. 9	セグメント	法人の内部管理の観点や財務会計との整合性を確保した上で、少なくとも、目標及び評価において一貫した管理責任を徹底し得る単位。
P. 10	キャリアパス	ある職位に就くまでに経験すべき業務や身につけるべき能力の順序や計画。
P. 11	クロスアポイントメント制度	研究者等が、大学や公的研究機関、民間企業等の間で、それぞれと雇用契約関係を結び、各機関の責任の下で業務を行うことが可能となる仕組み。
P. 14	気候変動に関する政府間パネル (IPCC)	人為起源による気候変動・影響・適応・緩和方策に関し、科学的、技術的、社会経済学的な見地から包括的な評価を行うことを目的として、1988年に世界気象機関(WMO)と国連環境計画(UNEP)により設立された組織。
P. 14	持続可能な開発目標 (SDGs : Sustainable Development Goals)	「国連持続可能な開発サミット(2015年9月25-27日)」で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」にかかげられた17の目標と169のターゲット。